本庄市遺跡調査会報告　第８集

東五十子赤坂遺跡

ヤマト運輸株式会社貨物集配施設建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

２００４

本庄市遺跡調査会

本庄市遺跡調査会報告　第８集

東五十子赤坂遺跡

ヤマト運輸株式会社貨物集配施設建設に伴う

埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

２００４

本 庄 市 遺 跡 調 査 会

序

本庄市の東五十子地区に「五十子陣」と呼ばれる中世の軍事拠点が存在したことはよく知られています。「五十子陣」は15世紀後半に勃発した上杉氏と古河公方の抗争に際し、上杉方が構築した陣で、現在でも東五十子地区に存在する「城跡」「城下」などの小字名に名残をとどめています。本書に報告する東五十子赤坂遺跡も、東五十子地区の字赤坂に所在する遺跡で、その地名から想起されるように、「五十子陣」の範囲のうちでも中核部に該当するものと考えられます。現に、今回の調査においても、青磁碗、瓦灯といった希少な遺物をはじめかわらけや火鉢など「五十子陣」における人間活動の一端をものがたる多くの資料が出土しました。

「五十子陣」の実態については、これまで必ずしも明らかになっておりませんでしたが、近年の考古学的な調査によって、部分的ながらもようやくその様相が解明されつつあります。今回の調査においても、「五十子陣」の究明に向けて、またひとつ貴重な成果を得ることができました。今後は、本書が学術研究、生涯学習、学校教育の場に広く活用されますとともに、将来の埋蔵文化財保護に役立てられることを希望する次第です。

最後になりましたが、当遺跡調査会の埋蔵文化財保存事業に格別のご理解を賜り、現地発掘調査から、資料の整理調査、さらには本書の刊行に至るまで多大なご協力を頂戴した飯島詔三様には、ここにあらためて深甚の謝意を表する次第です。また、調査に際してご指導、ご教示を賜りました方々、発掘現場で直接作業の労にあたられた皆様に心から御礼を申し上げます。

平成16年3月

本庄市遺跡調査会
会長　福島　巖

例　言

1. 本書は、埼玉県本庄市大字東五十子字赤坂672番1他に所在する東五十子赤坂遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、ヤマト運輸株式会社が計画する特別積合貨物運送用施設の建設に伴い、事前の記録保存を目的として本庄市遺跡調査会が実施したものである。
3. 発掘調査は、東五十子赤坂遺跡の300㎡を対象として実施した。
4. 発掘調査期間は以下のとおりである。
   自　平成11年2月22日
   至　平成11年3月19日
5. 発掘調査担当者は以下のとおりである。
   本庄市遺跡調査会　調査員　増田 一裕
   同　太田 博之
6. 発掘調査期間は以下のとおりである。
   自　平成11年4月1日
   至　平成16年3月31日
7. 整理調査担当者は以下のとおりである。
   本庄市遺跡調査会　調査員　太田 博之
8. 整理調査は、有限会社 毛野考古学研究所に委託した。
9. 本文の執筆は、Ⅰを本庄市教育委員会事務局が、遺物観察表の作成を有山径世（有限会社 毛野考古学研究所 調査部調査研究員）が、その他を和久 裕昭（有限会社 毛野考古学研究所 調査部主任調査研究員）が担当した。
10. 本書の編集は和久が担当した。
11. 本書に掲載した出土遺物、遺構および遺物の実測図ならびに写真、その他報告書に関係する資料は、本庄市教育委員会において保管している。
12. 発掘調査から整理調査、報告書の刊行に至るまで、以下の方々から貴重なご助言、ご指導、ご協力を賜りました。ご芳名を記し感謝申し上げます（順不同・敬称略）。
    大熊 季広　金子 彰男　車崎 正彦　恋河内 昭彦　昆　彰生　坂本 和俊　清水　豊　杉山 晋作
    鈴木 徳雄　外尾 常人　田中　信　田村 誠　徳山 寿樹　鳥羽 政之　長井 正欣　中沢 良一
    長瀧 歳康　日高　慎　松澤 浩一　丸山 修　矢内　勲
13. 東五十子赤坂遺跡の調査にかかる本庄市遺跡調査会の組織は、以下のとおりである（平成15年度現在）。

会　長	福島　巖	［本庄市教育委員会教育長］
理　事	揖斐 龍一	［本庄市教育委員会事務局長（会長代理）］
同	柴崎起三雄	［本庄市文化財保護審議委員］
同	野村 廣久	［同］
監　事	亀田 能紀	［本庄市行政委員会事務局長］
同	斉藤 貞子	［本庄市会計課長］
幹　事	吉田 敬一	［社会教育課長］
同	桜場 幸男	［社会教育課長補佐］
同	吉田　稔	［社会教育課文化財保護係長］
同	太田 博之	［社会教育課文化財保護係主査］
同	我妻 浩子	［同］
同	松本　完	［社会教育課臨時職員］
同	町田奈緒子	［同］
調査員	太田 博之	［社会教育課文化財保護係主査］
同	松本　完	［社会教育課臨時職員］
同	町田奈緒子	［同］

凡　例

1．本書所収の各種遺構図における方位針は、座標北を示す。

2．各遺構断面図に付記した水準数値は、東京湾平均海面（T. P.）に基づく海抜をｍ単位にて示したものである。

3．本書掲載の地形図については、各図の隅に出典を明記してある。

4．本調査における遺構名称は下記の記号で示し、本書掲載の本文、挿図、写真図版中の遺構名称も同一の記号を用いた。

　SD・・・溝状遺構　　SK・・・土坑　　P・・・ピット

5．本書掲載の遺構図ならびに遺物実測図の縮尺は、原則として以下のとおりである。個別の図におけるスケールにも、縮尺を明示してある。

［遺構図］

　遺跡全体図・・・1：150　　SK・・・1：60（一部1：80）

［遺物実測図］

　土器、土師器、埴輪、陶磁器・・・1：4　　金属製品・・・1：2

6．検出遺構観察表（表9）中、および本文中の遺構に関する事実記載においては、単位としてｍを用い、小数点以下第2位までの数値を四捨五入のうえ示している。

7．遺物観察表中の単位については、法量にcm、重さにｇを用いている。（ ）内の数値は推定値、［ ］内の数値は残存値をそれぞれ示す。

8．本書にて引用、ないし制作にあたって参照した文献については、その主なものを本文末にまとめて記載した。

9．本書巻末に掲げた報告書抄録では、遺跡の位置表示として、2002（平成14）年4月1日施行の測量法改正で採用された世界測地系（新国家座標）に基づく緯度・経度、および改正以前の日本測地系（旧国家座標）に拠った緯度・経度の両者を併記している。

目　次

序　　本庄市遺跡調査会会長　　福島　巖
例　言
凡　例
目　次

Ⅰ　調査に至る経緯 …… 1
Ⅱ　地理的・歴史的環境 …… 2
　1　地理的環境 …… 2
　2　歴史的環境 …… 2
Ⅲ　調査の方法と経過 …… 7
　1　調査の方法 …… 7
　2　調査の経過 …… 7
Ⅳ　調査の成果 …… 9
　1　遺跡の概要 …… 9
　2　検出された遺構と遺物 …… 9
　(1)　土坑 …… 9
　(2)　その他の遺構 …… 17
　(3)　遺構外出土遺物 …… 19
Ⅴ　まとめ …… 22

写真図版
報告書抄録

挿図目次

図１　埼玉県の地形 …… 2
図２　本庄市内の主な遺跡 …… 4
図３　東五十子赤坂遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 6
図４　遺跡全体図 …… 8
図５　SK-01・02 …… 9
図６　SK-01 出土遺物 (1) …… 10
図７　SK-01 出土遺物 (2) …… 11
図８　SK-02 出土遺物 …… 11
図９　SK-03 …… 12
図10　SK-03 出土遺物 …… 13
図11　SK-04 …… 14
図12　SK-04 出土遺物 …… 15
図13　SK-05～08 …… 16
図14　SK-07 出土遺物 …… 17
図15　SD-01 出土遺物 …… 17
図16　遺構外出土遺物 (1) …… 18
図17　遺構外出土遺物 (2) …… 20

表　目　次

表１　SK-01 出土遺物観察表 …… 11
表２　SK-02 出土遺物観察表 …… 12
表３　SK-03 出土遺物観察表 …… 13
表４　SK-04 出土遺物観察表 …… 15
表５　SK-07 出土遺物観察表 …… 17
表６　SD-01 出土遺物観察表 …… 17
表７　遺構外出土遺物観察表 (1) …… 19
表８　遺構外出土遺物観察表 (2) …… 20
表９　検出遺構観察表 …… 21

写真図版目次

写真図版１　遺跡の位置および周辺の地形
写真図版２　調査区東部
　　調査区西部
　　SK-01・02 (1)
写真図版３　SK-01・02 (2)
　　SK-03
　　SK-04
写真図版４　SK-01・02 出土遺物
写真図版５　SK-03 出土遺物
　　SK-04 出土遺物
　　SK-07 出土遺物
　　SD-01 出土遺物
　　遺構外出土遺物 (1)
写真図版６　遺構外出土遺物 (2)

Ⅰ　調査に至る経緯

1999(平成11)年1月11日、東京都中央区銀座2丁目16番10号ヤマト運輸株式会社取締役社長有富慶二氏から、本庄市大字東五十子636番地飯島詔三氏が所有する本庄市大字東五十子字赤坂672番1、673番1、および659番2の合計面積2,095㎡の土地に特別積合貨物運送用施設を建設する計画があり、これにかかる『埋蔵文化財の所在及び取扱いについて』の照会が、本庄市教育委員会に提出された。本庄市教育委員会で埼玉県教育委員会発行の『本庄市遺跡分布地図』をもとに、同地の埋蔵文化財包蔵地の有無を調査したところ、当該の事業計画地には、周知の埋蔵文化財包蔵地東五十子赤坂遺跡(53-038)が所在することが判明した。東五十子赤坂遺跡はそれまで発掘調査の前例がなかったが、遺跡の所在地は15世紀後半の軍事施設である「五十子陣」の中心部分の西側にあたり、「赤坂」という小字名からも「五十子陣」に関係する遺構の存在が十分に予測された。

本庄市教育委員会では、以上のような状況をふまえ、当該事業計画地について、埋蔵文化財の試掘調査を実施することとし、1999年1月28・29日の両日、現地調査を実施した。その結果、当該埋蔵文化財包蔵地において、溝、大小の土坑多数を検出するとともに、「かわらけ」、中世土器などの遺物を検出したことから、「五十子陣」関連の遺構が所在する可能性が高いと判断された。

本庄市教育委員会では、以上の試掘調査の結果に基づいて、同年2月1日付本教社発第205号で『埋蔵文化財の所在及び取扱いについて』の回答を事業者あて送付し、1.協議のあった土地については周知の埋蔵文化財包蔵地である東五十子赤坂遺跡が所在することから現状保存が望ましいこと、2.やむを得ず現状変更を実施する場合は、文化財保護法第57条2第1項、同第99条3第1項および文化財保護法施行令第5条第2項の規定に基づき埼玉県教育委員会あて埋蔵文化財の届出を提出すること、3.埋蔵文化財発掘の届出を提出の後は埼玉県教育委員会の指示に従い、当該埋蔵文化財の保護に万全を期すこと、4.本回答後は関係機関との協議を徹底することの旨を通知した。

その後の協議の結果、他に特別積合貨物運送用施設建設の適地がなく、土地所有者である飯島詔三氏との間で契約を締結したうえで本庄市遺跡調査会が調査主体となり、発掘調査を実施して記録保存の措置をとることとなった。なお、発掘調査の対象は貨物運送用施設および付属の排水施設設置部分にとどめ、緑地および駐車場など埋蔵文化財への掘削が及ばない範囲は、必要な盛土などを行い、極力現状での保存を図ることとした。

発掘調査のための手続きは、1999年2月22日付で、事業者から文化財保護法施第57条2第1項の規定による埋蔵文化財発掘の届出が提出され、本庄市教育委員会ではこれを受けて、1999年2月22日付本教社発第226号で埋蔵文化財発掘の届の取扱いについての副申を沿え、同届出を同22日付本教社発第225号で埼玉県教育委員会あて進達した。また、同日付本遺会発第1号で本庄市遺跡調査会から埋蔵文化財発掘調査の届出が提出され、本庄市教育委員会ではこれを受けて、同日付本教社発第227号で埼玉県教育委員会あて進達した。

現地における発掘調査は、1999年2月22日から同年3月19日までの期間で実施した。

Ⅱ　地理的･歴史的環境

1　地理的環境

本庄市は、埼玉県北西部に位置する人口約6万 1,000 人の中核都市である。埼玉県に属しながら、気候、風土、経済、文化などの各側面において、古くから隣接する群馬県南西部との関連が深い。近年では拠点法の制定をうけ、2004（平成 16）年度の上越新幹線駅開業に前後して各種の開発事業が進められている。

市の北東部では、烏川などに由来する氾濫原（本庄低地）に南接する形で、本庄台地が位置する。本庄台地は、洪積世末期の立川期に神流川の堆積作用によって形成された扇状地性台地である。おおむね砂礫層を主体とするが、粘土層や粘質ローム層などが複雑に堆積しており、地点によってその様相は変化する。扇頂部は児玉郡神川村大字寄島地区にあり、扇端部は本庄市市街地北縁、さらには同市大字東五十子付近を通る。市の中央付近を東流する女堀川の浸食により、本庄低地と接する台地北側では河岸段丘が形成されている。段丘崖の高さは4～ 12m、崖線は8km 前後にわたって東西に連なる。東五十子赤坂遺跡は、この本庄台地の北東部、上記河岸段丘の縁に位置する。

2　歴史的環境

現在、本庄市においては、遺物散布地を含めた弥生時代以前、および近世以降の遺跡は少数にとどまる一方、古墳時代、奈良・平安時代、中世の遺跡が多く周知されている。以下、市域における各時代の主要な遺跡、および東五十子赤坂遺跡周辺の概況について記す。

〔旧石器時代〕　明確に遺構と認定しうる事例は、いまだ知られていない。宥勝寺北裏遺跡の調査にてローム層中より剥片が出ているが、これが現在までのところ市内唯一の包含層出土遺物である。他の遺物は、

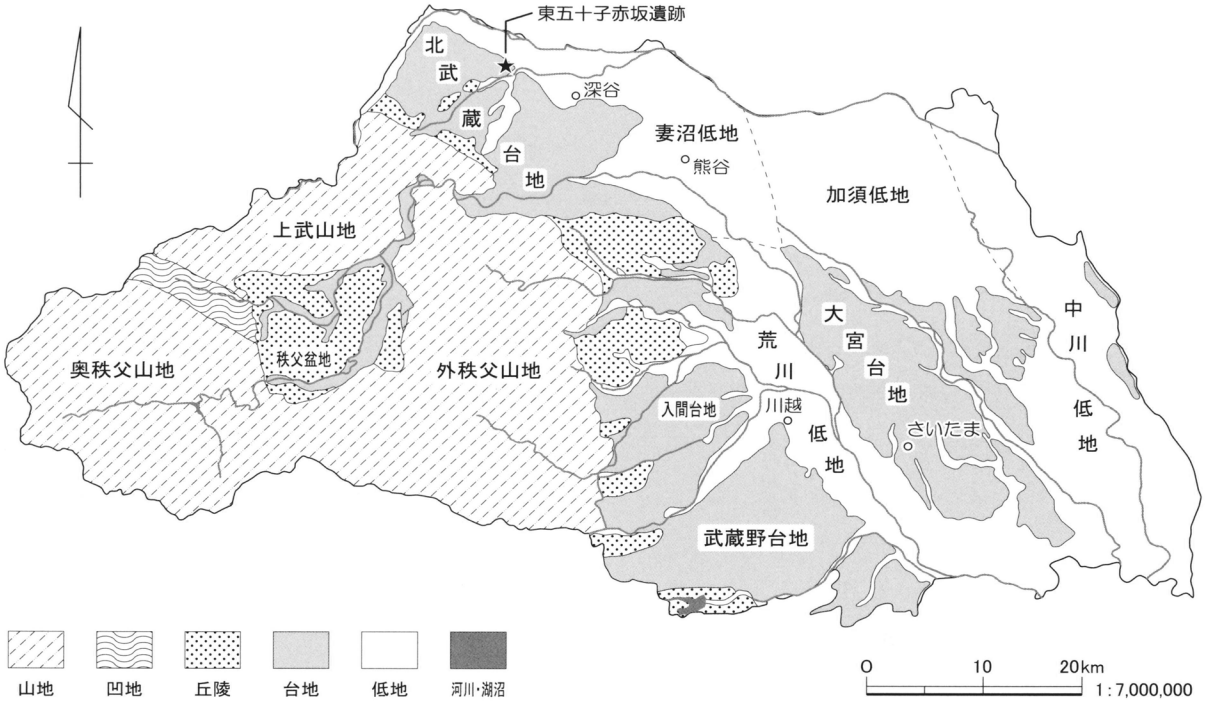


図1　埼玉県の地形

古墳時代の調査などにおいて混入といった形で副次的に見つかっている。石神境遺跡、社具路遺跡、西五十子田端遺跡にてナイフ形石器、古川端遺跡で細石刃、彫器、剥片、三杢山遺跡で船底形石器と尖頭器、大久保山Ⅰ遺跡にて石核、柏一丁目3番地内では尖頭器が、それぞれ採集されている。

〔縄文時代〕　将監塚、西富田前田の両遺跡で集落跡が確認されている。将監塚遺跡では、中期を中心とする多数の住居跡が検出された。

図2で示した遺跡にて、主に中期から後期にかけての遺物の散布が知られる。このうち宥勝寺北裏と大久保山Aの両遺跡は、晩期を除くほとんどの時期の遺物を包蔵する遺跡として特筆されよう。

草創期の資料が比較的そろっているのも、市域の特徴である。笠ヶ谷戸遺跡、将監塚遺跡では、有舌尖頭器が単独で、また大字小島の万年寺地区からは、草創期特有の大形打製石斧が出土した。宥勝寺北裏遺跡では、小片ながら爪形文土器12点と多縄文系土器約20点、および早期の押型文土器の破片200点弱が採集されている。

〔弥生時代〕　大久保山周辺に遺跡が比較的多く分布する。大久保山A遺跡では中期の再葬墓とおぼしき土坑1基、大久保山ⅢB遺跡で後期の住居跡2軒、同ⅣA遺跡にて同じく4軒、近接する山根遺跡でも住居跡の調査例がある。このほか、宥勝寺北裏遺跡で中・後期、下野堂地区において後期の土器破片がそれぞれ見つかっている。児玉郡域の当該期遺跡は、概して丘陵上や谷筋周辺に立地する傾向をもつ。本庄市内では同様の地形が少なく、その点が居住地選定に際しての制約となっていた可能性も考えられる。

〔古墳時代〕　4世紀（いわゆる五領式期）の集落遺跡は、女堀川中流域や男堀川周辺に集中する傾向を示す。一方、5世紀後半に入ると、大字西富田地区と本庄段丘崖地区を中心に、集落遺跡が急増する。こうした動向は、首長墓としての古墳葬制の採用、初期カマドの導入、加えて須恵器模倣品や大形甑の出現が示唆する社会的な変化の影響を受け、弥生時代以来の選地が変容していく過程ととらえることができよう。なお、西富田二本松遺跡は、関東地方における初期カマド導入の住居跡が昭和30年代に調査された事例として、学史的にも著名である。

6・7世紀（いわゆる鬼高式期）には、遺跡数がさらに増加する。6世紀に属する夏目遺跡第51号住居跡のカマドからは、祭祀に用いられた可能性のある高坏や三連小坩が出土している。カマド構築時に袖へ臼玉や勾玉を埋納する風習が顕著になるのはこのころである。なお、東五十子城跡内遺跡の第10号住居跡からは、玉類とともに多量の鉄製工具が出土しており、注意される。7世紀、遺跡数はひとつのピークを迎え、各遺跡における遺構の重複も顕著となる。いまい台産業団地造成に際する発掘調査では、一遺跡でじつに333軒もの住居跡が検出された。薬師元屋舗遺跡第24号住居跡では、U字状のクワ先が出土している。

方形周溝墓は、弥生時代のものが市域においてほぼ皆無なのに対し、当該期の類例が今井諏訪遺跡（4世紀）と万年寺遺跡（4・5世紀）にて多数検出されている。ただし、後者の例に関しては、一辺30m以上で低墳丘をもつものもあり、一部方墳も含まれている可能性が高い。

市内では、かつて200基以上の古墳が存在したとみられるが、今や盛土が残るものにして10基あまりを数えるにすぎない。これらのうち、八幡山古墳、蚕影山古墳、山ノ神古墳は、市指定文化財として保存されている。

児玉郡では古式古墳が多く知られ、本庄市内でも5世紀前半に築造されたとみられる事例が点在する。前山1号墳（前方後円墳）が最古とされ、木棺直葬で埴輪の用いられていない前山2号墳（方墳）がこれに次ぐ。小形坩と滑石製模造品の出土をみる万年寺つつじ山古墳（方墳）、これに隣接する万年寺八幡山

遺跡地名一覧

縄文時代遺物出土地

1　宥勝寺北裏遺跡（早期～後期）
2　大久保山Ａ遺跡（早期～後期）
3　東五十子遺跡　（中期～後期）
4　諏訪新田遺跡　（中期）
5　小島遺跡　（中期）
6　二本松遺跡　（中期）
7　公卿塚古墳　（後期）
8　四方田字前山
9　大久保山Ｂ遺跡（中期）
10　西谷遺跡　（前期）

弥生時代遺物出土地

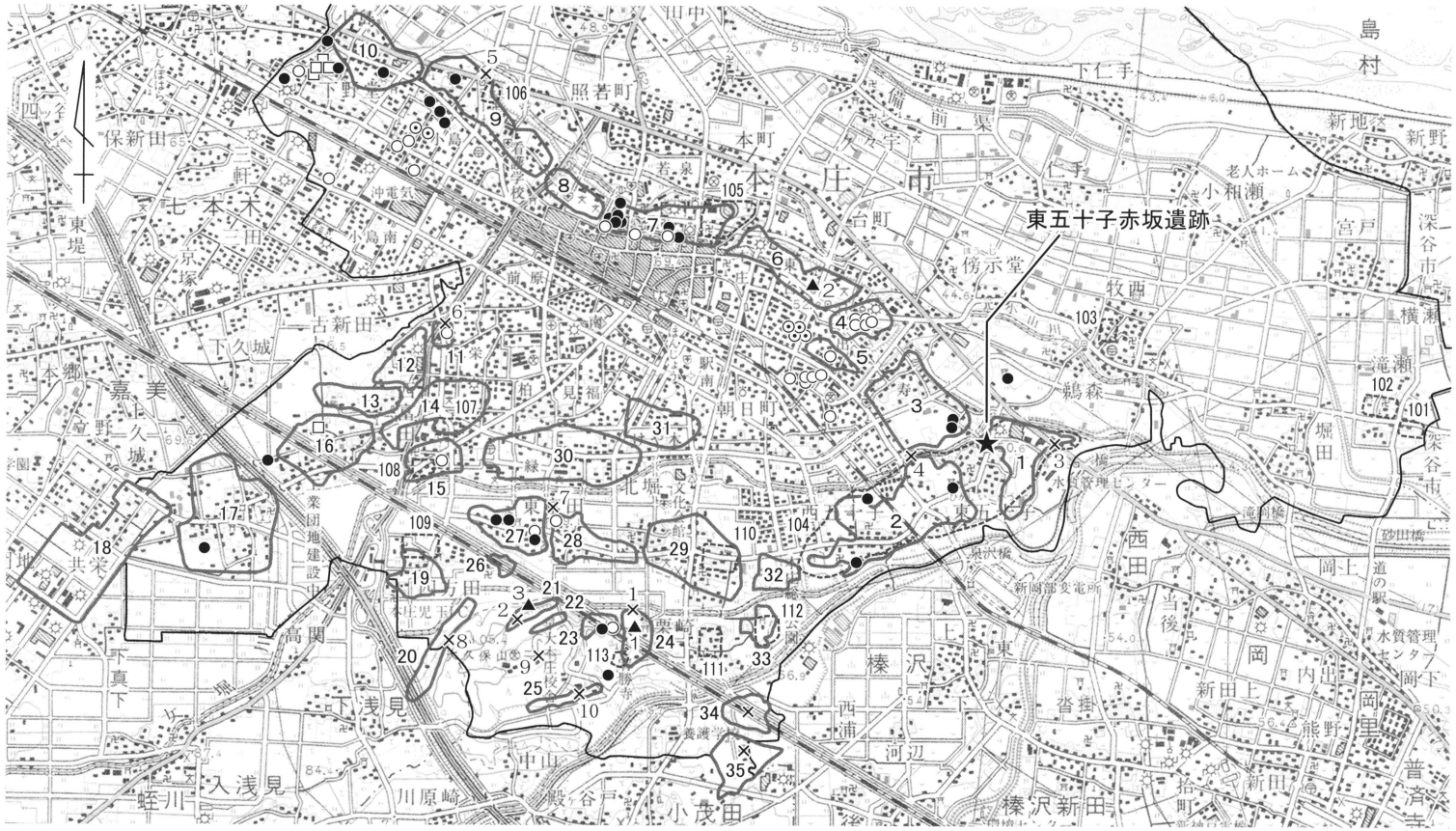
1　宥勝寺北裏遺跡
2　薬師堂遺跡
3　大久保山Ａ遺跡

古墳時代～古代集落

1　東五十子遺跡　（4～10C）
2　西五十子遺跡　（6C～）
3　諏訪新田遺跡　（4～8C）
4　御堂坂遺跡　（6C～）
5　大塚遺跡　（6～10C）
6　薬師堂遺跡　（5～10C）
7　本町遺跡　（5C～）
8　北原遺跡　（6C～）
9　小島遺跡　（4～8C）
10　万年寺遺跡　（6～10C）
11　二本松遺跡　（5C）
12　夏目遺跡　（5～7C）
13　西富田新田遺跡（5C）
14　薬師遺跡　（6～10C）
15　本郷遺跡　（5～7C）
16　東今井遺跡　（6C～）
17　西今井遺跡　（6C～）
18　北共和(将監塚・古井戸)遺跡（6C～）
19　四方田遺跡　（5C～）
20　山根遺跡　（5C～）
21　大久保山Ａ遺跡（5C～）
22　大久保山Ｃ遺跡（6～7C）
23　前山遺跡　（5C～）
24　宥勝寺遺跡（5～10C）
25　西谷遺跡　（6～7C）
26　下田遺跡　（6C～）
27　東富田遺跡（5C～）
28　久下塚遺跡（5C～）
29　本田遺跡　（6～8C）
30　伊丹堂遺跡（6～7C）
31　笠ヶ谷戸遺跡（5C～）
32　諏訪台遺跡（6～10C）
33　東本庄遺跡（6～10C）
34　古川端遺跡（5C～）
35　川原山遺跡（5C～）

城跡・館跡・墳墓址

101　滝瀬陣屋跡
102　滝瀬氏館跡
103　牧西氏館跡
104　五十子陣跡
105　本庄城跡
106　小島氏館跡
107　富田氏館跡
108　富田氏館跡
109　四方田氏館跡
110　北堀館跡
111　栗崎館跡
112　東本庄館跡
113　東谷中中世墳墓址



× 縄文時代遺物出土地　▲ 弥生時代遺物出土地　□ 方形周溝墓　● 古墳（完存）
⊙ 古墳（半壊）　○ 古墳（痕跡）　古墳時代～古代集落　城跡・館跡・墳墓址

0　3km
1:50,000

＊ 国土地理院理 1998 1:50,000地形図 NJ-54-30-15（宇都宮15号）高崎、および本庄市 1976 をもとに作成。同書付図中の掲載番号を流用している関係上、遺跡の番号が不連続となっている。

図2　本庄市内の主な遺跡

古墳も埴輪を伴わない。やや後続の公卿塚（くげづか）古墳は直径69mと推測される大型円墳で、格子目叩き技法の円筒埴輪と形象埴輪、滑石製模造品が出土している。このほか、埼玉県選定重要遺跡の旭・小島古墳群は、古墳の分布数（86基）において特筆されよう。また、塚合古墳群、西五十子古墳群、東五十子古墳群については、古式群集墳の段階から形成が始まっていることが明らかになりつつある。

〔奈良・平安時代〕　ひき続き集落遺跡が多数に上る一方で、遺構の分布密度がやや散漫となる。将監塚遺跡や本庄城址内遺跡、大久保山遺跡の調査成果より、これらが計画的に建設された村落である可能性が指摘されている。計画性といえば、条里（制）遺構も重要な当該期遺構として挙げられよう。律令制のもと、地域集団単位でなされた大規模土木工事の痕跡で、水路が付随する。本庄市周辺の水路は、幹となる水路から順次枝分かれし（猿尾状水路）、水路が立体的に交差する（樋越し構造）点に特徴がある。産業団地造成や土地改良事業がさかんになる以前、女堀川流域には県内有数の条里遺構が分布し、一部はごく最近まで活用されていた。

特徴的な遺物を伴う遺跡としては、文字線刻紡錘車が見つかった薬師元屋舗遺跡と田端屋敷遺跡がまず挙げられる。前者第51号住居跡出土の紡錘車には、「武蔵野国児玉郡草田郷戸主大田部身万呂」の線刻があり、『和名抄』高山寺本に見える草田郷の所在を数百年ぶりに立証する文字資料となった。東五十子の田端屋敷遺跡からは、県内で最多文字数の刻まれた紡錘車が発見された。このほか、天神林Ⅱ遺跡第2号住居跡では、金属製品を模倣した可能性のある三足付き鍋状土器、本庄城址内遺跡第10号住居跡の床面からは、985年初鋳の唐国通宝がそれぞれ出土している。

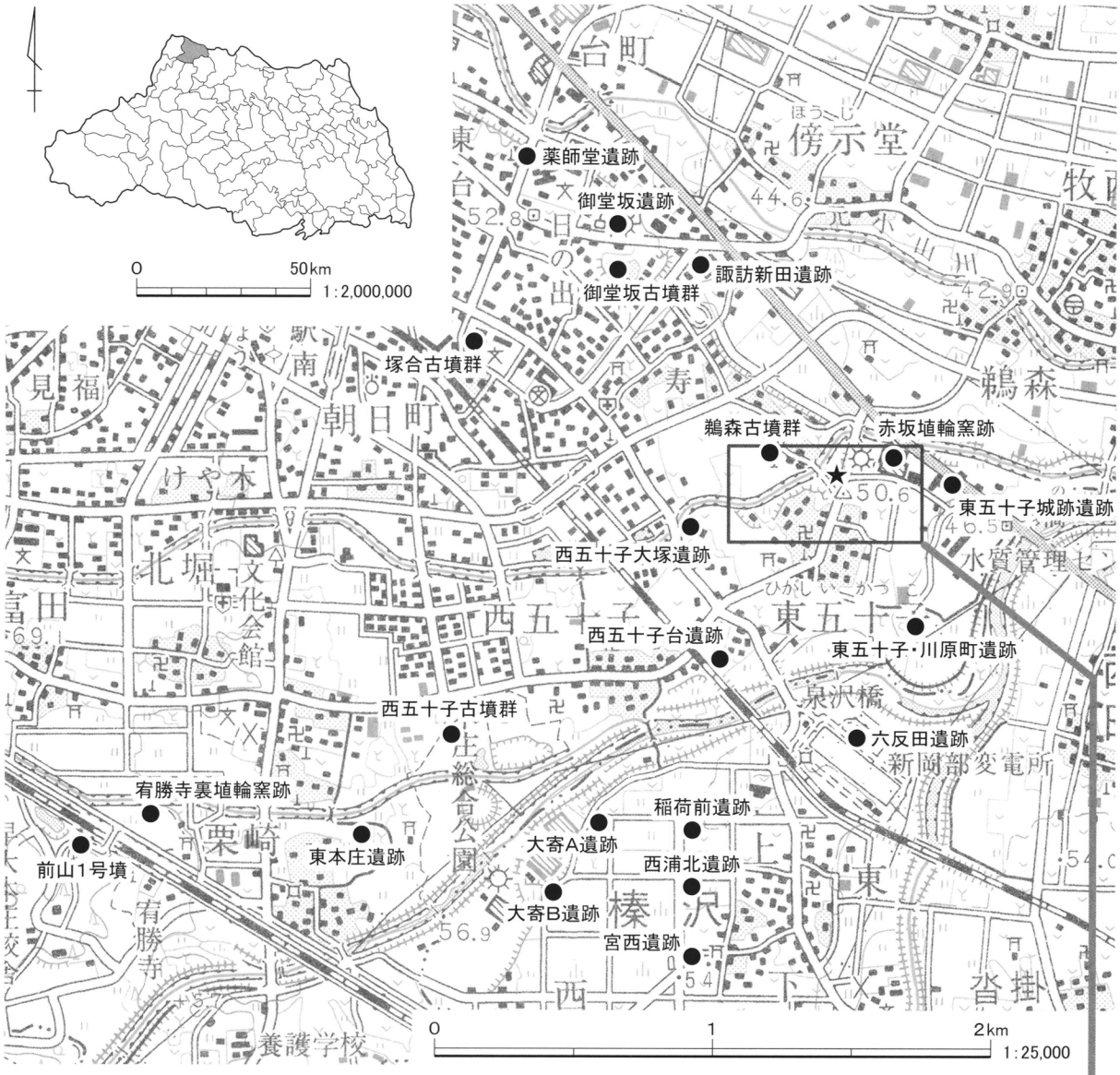
〔中・近世〕　律令制が崩壊しつつあった古代末、市周辺では武蔵七党のひとつである児玉党が結成された。その後、児玉党の本流と分家は、児玉郡内に多くの居館を構え、それらが（伝）四方田氏館跡、（伝）富田氏館跡、（伝）今井氏館跡、栗崎館跡、本田館跡、東本庄館跡として残っている。ただし、いずれについても、本格的な発掘調査はこれまで行われていない。

やや下って15世紀後半、関東管領上杉氏と古河公方足利氏の対立が顕在化し、武蔵・上野を領する上杉方は、拠点として五十子陣（城）を構築した。以来、1478（文明10）年の上杉氏と古河公方との和睦がなるまで、同陣周辺はおよそ20年にわたって、五十子の合戦に代表されるような戦乱の舞台となる。城跡という字名を現在に残す五十子陣は、久しく実態不明の史跡とされていた。しかし近年、広域圏清掃センターの建設に伴い、3年にわたる発掘調査が実施され、陣の中心ではないものの、関連遺構や大量の土師器小皿、輸入陶磁器などが発見されている。

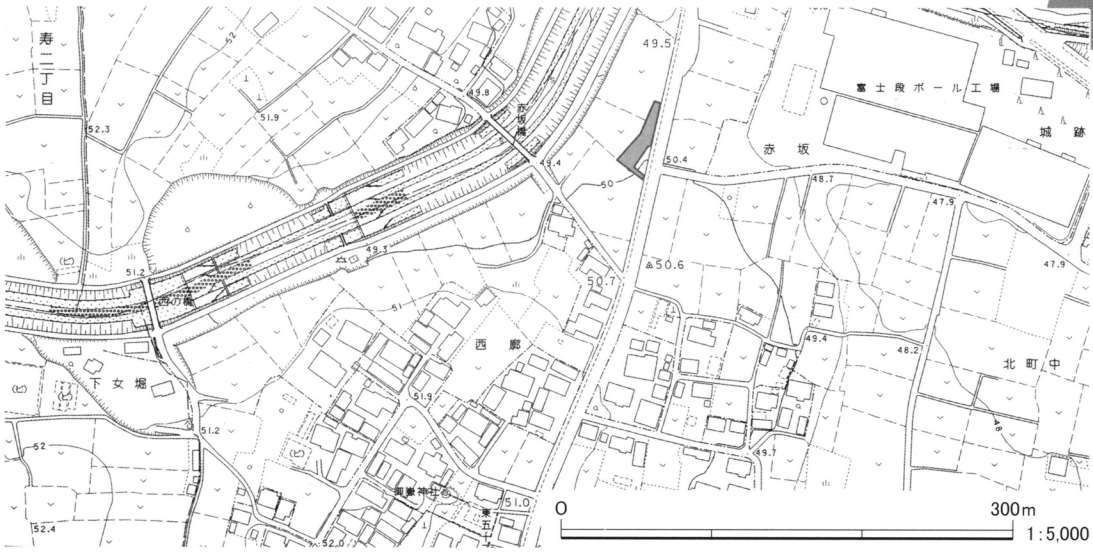
一方、大久保山寺院跡にほど近い東谷中世墓群では、未調査ながら古瀬戸や鉄釉の壺が採集されている。大久保山寺院跡は、児玉党本家である庄（荘）氏の菩提寺となる可能性があり、両遺跡の関連が注目されている。このほか、社具路遺跡第4地点では、和鏡が埋納された墓穴が検出されている。

五十子陣廃絶の前後より、在地の庄氏は本宗家を本庄と呼ぶようになった。これが、本庄市の名のゆえんである。本庄氏は、東本庄にあった拠点を1556（弘治2）年に現在の市役所付近へ移して本庄城としたが、豊臣氏による小田原攻めの際、後北条氏にくみしたかどで滅亡に追いこまれてしまう。まもなく江戸の世となり、本庄城はわずか56年で廃城に至る。その後の同城周辺は、むしろ中山道沿いの宿場町として、今日の本庄市発展の礎を築いていくことになる。なお、市内において近世を対象として調査が行われた例はいまだまれで、他の時代の調査中に民家遺構や近世墓、陶磁器などが副次的に検出されるのみである。

〔近代〕　近世同様、対象は限定されるものの、埋蔵文化財の観点から近・現代史に光を当てる試みがいくつか行われている。市役所新庁舎建設に先がけては製糸工場跡が調査され、施設の構造による問題



＊ 国土地理院理 1998 1:50,000地形図 NJ-54-30-15（宇都宮15号）高崎 をもとに作成。



＊ 本庄市役所 1998 1:2,500 本庄市都市計画図19（IX-JC 16-3）をもとに作成。

図3　東五十子赤坂遺跡の位置と周辺の遺跡

から明確な遺構は検出されなかったものの、ガラス瓶や養蚕関係の陶磁器が多量に出土した。日本鉄道本庄駅開業以来、近代の本庄は養蚕の町であり、製糸工場とその煙突は、町の景観の一部をなすものであった。また、神保原駅から小島万年寺を経由するトロッコ軌道跡は、烏川の砂利を採取する目的で敷設されたものであるが、この一部でも調査が行われている。さらに、戦時中の遺跡として、青葉隊の塹壕跡、排水施設と薬きょうが確認された児玉飛行場が挙げられる。

〔東五十子赤坂遺跡周辺の概況〕　西五十子田端遺跡にて後期旧石器時代のナイフ形石器が採集されているほか、諏訪新田遺跡、および東五十子城跡遺跡にて、縄文時代の遺物の散布が確認されている。

古墳時代では、西五十子古墳群で4・5世紀、1956・61(昭和31・36)年調査の東五十子城跡遺跡で5世紀後半の集落が確認されている。後者は、多数の鉄製工具や玉類、砥石、紡錘車を出土する住居跡の調査例を擁する。近辺の古墳をみると、前述の前山1・2号墳がいち早く造営され、B種ヨコハケ調整の円筒埴輪を伴う塚合古墳群が後続したようである。本遺跡周辺は良質の粘土を産出する場所であり、こうした地の利を活かした埴輪製作址として、赤坂と宥勝寺裏の両埴輪窯跡が近在することにも注意される。このほか、5世紀から奈良・平安時代にかけての集落遺跡が多く、諏訪新田、御堂坂、薬師堂、六反田、稲荷前、大寄A・B、西浦北、宮西、東五十子・川原町の各遺跡が分布する。

五十子陣跡は、本庄台地の東端、東五十子から西五十子までの東西2km弱、南北1km強の範囲内に位置する。同時期の遺構・遺物を伴い、陣跡の範疇ないし近辺に位置する遺跡としては、西五十子大塚遺跡、西五十子台遺跡、西五十子古墳群、東本庄遺跡、東五十子・川原町遺跡が挙げられる。なお、東五十子赤坂遺跡の「赤坂」は、一般に城郭の一端や交通の要衝と深く関係することの多い地名である。五十子陣から上野の那波城や臼井城へは、この赤坂より発し、傍示堂を経る道によって通じていたとされる。当時、烏川は傍示堂の北を流れており、武蔵と上野の国境としての役割を果たしていた。傍示堂という字名については、国境、あるいは中山道と脇街道の分岐点がある旨標示を立てたことに由来するとの説もある（本庄市 1986）。

Ⅲ　調査の方法と経過

1　調査の方法

試掘調査の成果などを参考にし、遺構確認面をローム層上面と定め、その直上までは重機を用いて掘削した。その後、遺構の確認と調査は人力にて行った。掘削に先がけて、調査範囲のうち道路に面した箇所に防護柵を設置した。現地実測の基準として方眼基準杭と基準点を設置し、各種遺構図は手実測により縮尺1/20で作成した。遺構の写真撮影には、35mmのモノクロ、カラーネガ、リバーサルの各フィルムを使用した。遺跡の略号は53－038とし、出土遺物の注記などにこれを用いた。遺物の取り扱いについては、接合にセメダインC、復元に石膏、写真撮影に35mm・6×7判モノクロフィルムをそれぞれ使用した。

2　調査の経過

発掘調査は、1999（平成11）年2月22日から同年3月19日にかけて実施された。遺構調査終了後、調査区を埋め戻して事業者側へ引き渡しを行った。整理調査は1999（平成11）年4月1日から2004（平成16）年3月31日にかけて実施し、同年3月31日付で報告書を刊行した。

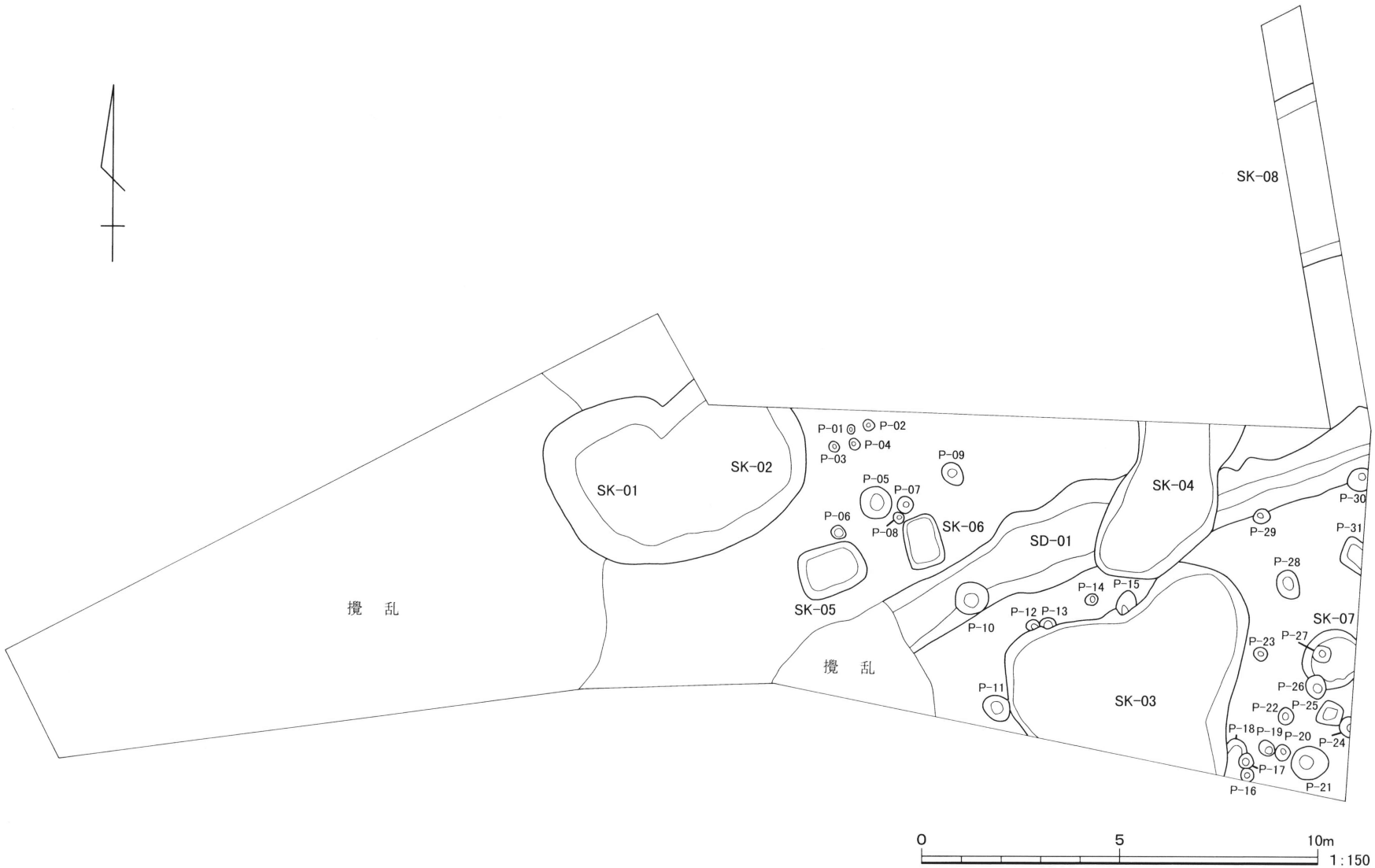

SK-08
SK-01
SK-02
SK-03
SK-04
SK-05
SK-06
SK-07
SD-01
撹　乱
撹　乱
P-01
P-02
P-03
P-04
P-05
P-06
P-07
P-08
P-09
P-10
P-11
P-12
P-13
P-14
P-15
P-16
P-17
P-18
P-19
P-20
P-21
P-22
P-23
P-24
P-25
P-26
P-27
P-28
P-29
P-30
P-31
0
5
10m
1:150

図 4　遺跡全体図

Ⅳ 調査の成果

1 遺跡の概要

東五十子赤坂遺跡は台地北側の縁辺部、女堀川の河岸を100mほど離れて望む場所に立地する。前章にて記述のとおり、近辺のローム下には窯業に好適な粘土が堆積しており、この地味を生かすような格好で、本遺跡の北東およそ300mには赤坂埴輪窯跡が位置する。

300㎡を対象とする調査で検出された遺構の内訳は、土坑8基、ピット31基、溝状遺構1条である。これらの覆土からは、土師器、中世土器、陶磁器などの遺物が見い出されている。また、遺構外出土ながら、埴輪の破片多数と耳環1点が採集されている。

2 検出された遺構と遺物

(1) 土 坑

各遺構の構築ないし廃絶時期の大半は不詳であるが、覆土より出土した遺物の内容から、うち1基については中世に属する可能性がある。

SK-01・02（図5～8、表1・2）

位 置： 調査区中央部に位置する。遺構北東部が調査区外に位置し、西部に攪乱を受けている。

形 状： 長径6.40m、短径4.24mを測り、遺構確認面において、平面は不整楕円形ないし双円形に近い。断面は、凸レンズが連なったような形状を呈する。

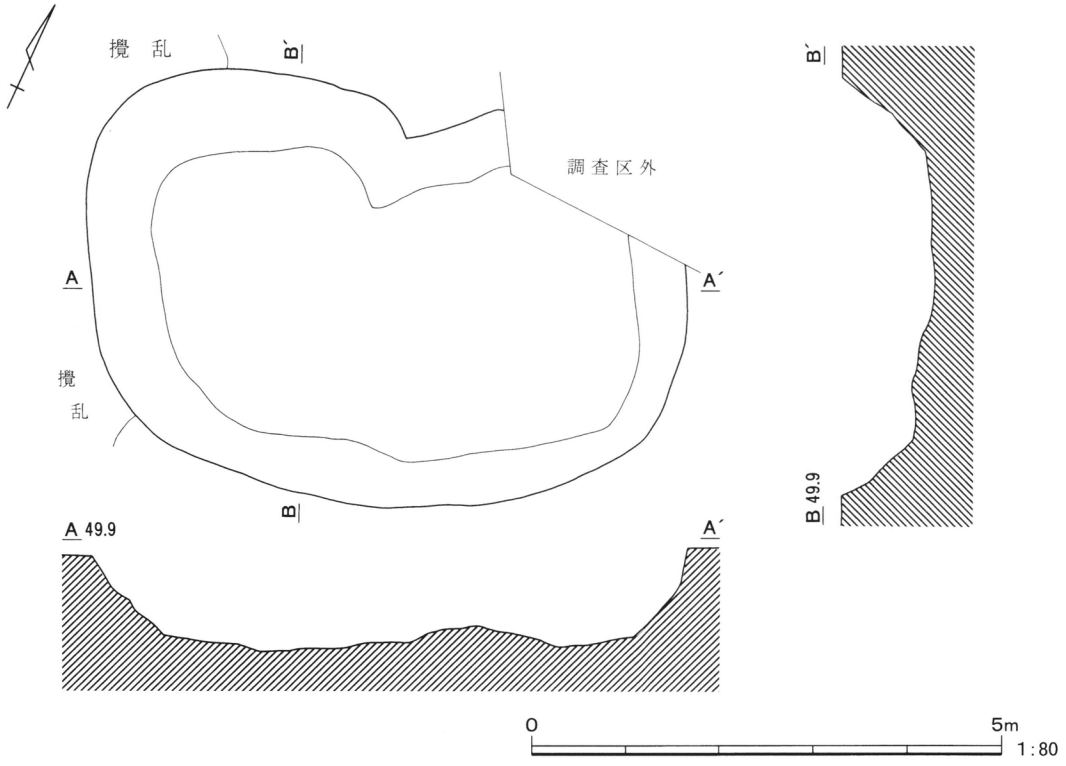


図5 SK-01・02

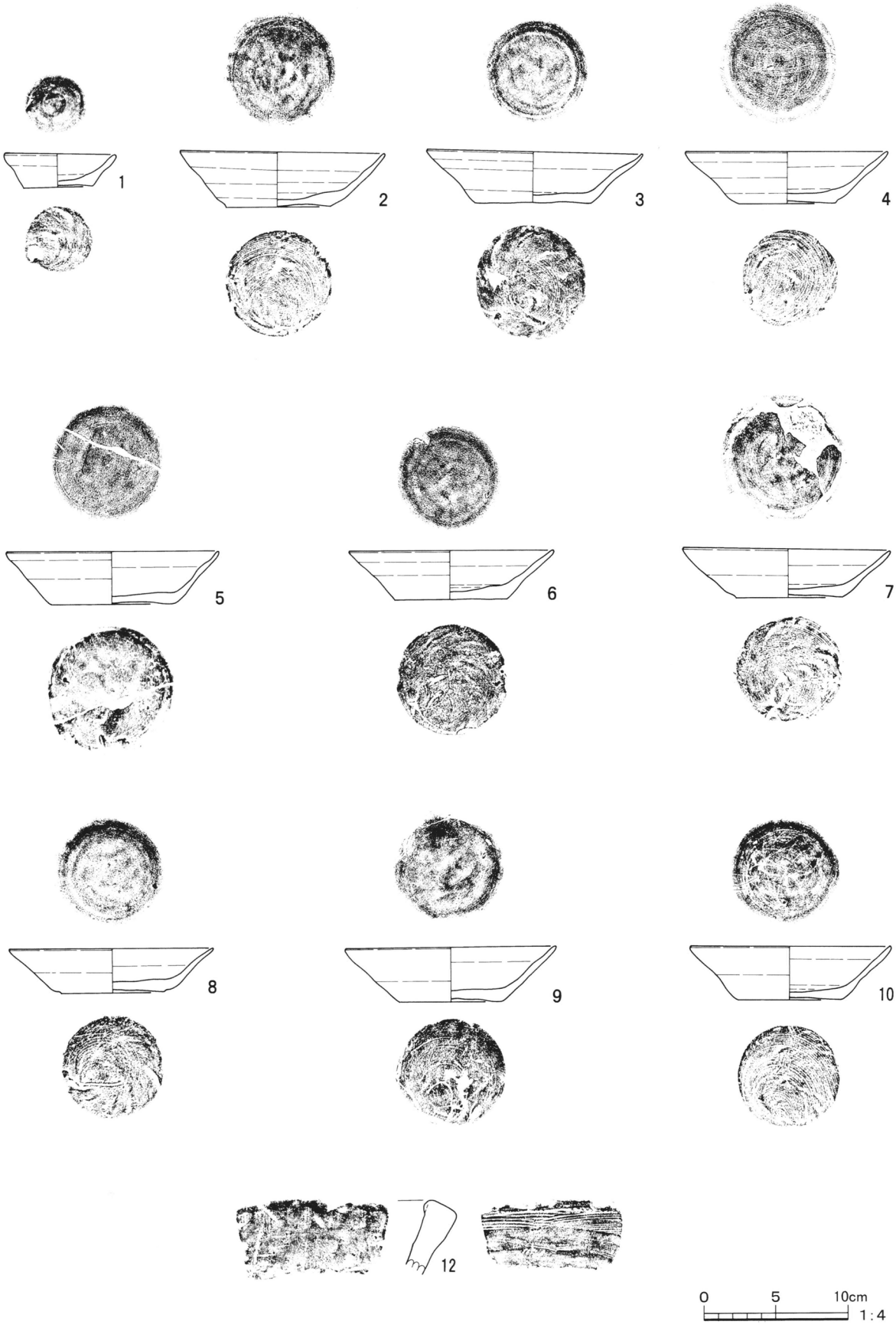


図6 SK-01 出土遺物(1)

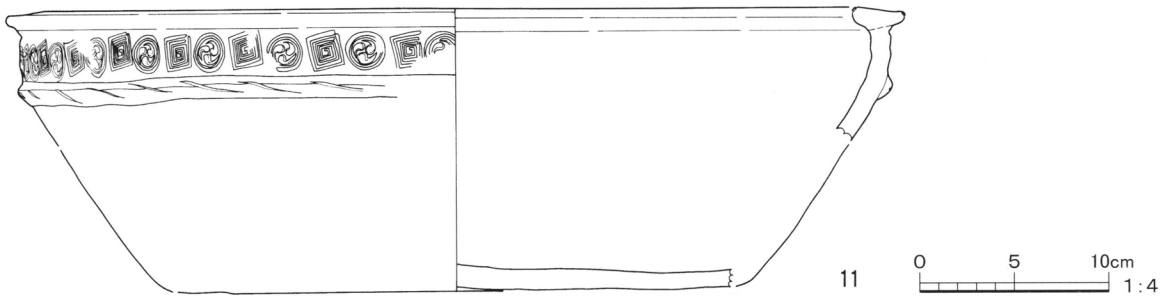


図7 SK-01 出土遺物(2)

No.	器　種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備　考
1	中世土器 かわらけ	口径　7.8 底径　4.7 器高　2.5	体部は直線的に立ち上がり、中位で外反する。	体部ロクロ整形。底部左回転糸切り。見込螺旋状ロクロ目。	金雲母・黒色粒 内外－明褐色	完形。
2	中世土器 かわらけ	口径　14.3 底径　7.2 器高　3.9	体部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形。底部右回転糸切り。見込中央ユビナデ。	金雲母・黒色粒・赤褐色粒 内外－橙色	一部欠損。
3	中世土器 かわらけ	口径　15.0 底径　8.0 器高　3.7	体部は直線的に立ち上がり、中位で外反する。見込周縁部くぼむ。	体部ロクロ整形。底部回転糸切り。見込中央ユビナデ。	金雲母・黒色粒・赤褐色粒 内外－橙色	一部欠損。
4	中世土器 かわらけ	口径　14.0 底径　6.6 器高　3.8	体部は直線的に立ち上がり、中位で外反する。	体部ロクロ整形。底部右回転糸切り。見込不規則な線刻あり。	金雲母・黒色粒・赤褐色粒 内外－橙色	一部欠損。
5	中世土器 かわらけ	口径　14.7 底径　8.5 器高　3.8	体部は直線的に立ち上がり、口縁部はやや内彎する。見込周縁部くぼむ。	体部ロクロ整形。底部回転糸切り。見込中央直線的なユビナデ。	金雲母・黒色粒・赤褐色粒 内外－橙色	一部欠損。
6	中世土器 かわらけ	口径　14.2 底径　7.8 器高　3.6	体部は直線的に立ち上がり、中位でゆるやかに外反する。見込周縁部わずかにくぼむ。	体部ロクロ整形。底部左回転糸切り。見込中央ユビナデ。	金雲母・黒色粒・赤褐色粒 内外－明赤褐色	2／3。
7	中世土器 かわらけ	口径　14.4 底径　7.3 器高　3.6	体部は直線的に立ち上がり、中位で外反する。	体部ロクロ整形。底部右回転糸切り。見込螺旋状ロクロ目。	金雲母・黒色粒・赤褐色粒 内外－橙色	3／4。
8	中世土器 かわらけ	口径　(14.2) 底径　7.0 器高　3.2	体部は直線的に立ち上がり、中位で外反する。	体部ロクロ整形。底部右回転糸切り。見込螺旋状ロクロ目。	金雲母・黒色粒・赤褐色粒 内外－橙色	2／3。
9	中世土器 かわらけ	口径　(14.6) 底径　7.0 器高　3.9	体部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形。底部右回転糸切り。見込中央ユビナデか。	金雲母・黒色粒・赤褐色粒 内外－にぶい褐色	2／3。
10	中世土器 かわらけ	口径　(13.9) 底径　7.0 器高　3.8	体部は直線的に立ち上がり、中位で外反する。	体部ロクロ整形。底部右回転糸切り。見込不規則な線刻。	金雲母・黒色粒 赤褐色粒 内外－にぶい褐色	2／3。
11	瓦質陶器 火　鉢	口径　(47.6) 底径　(30.0) 器高　(14.8)	平底。胴部は上位で内彎し、口縁部は内側に折れ曲がる。外面に凸帯を2条めぐらせ、間に雷文・三つ巴文のスタンプ文押捺。	外面－口唇部ヘラケンマ、体部～胴部上位ヘラナデ、底部ナデ。内面－ロクロ整形。	白色粒・黒色粒 内外－灰色	口縁部・底部1／6残存。 凸帯上にキザミ。
12	土師質土器 鉢	口径　－ 底径　－ 器高　－	口唇部は肥厚する。	外面－ヘラナデ。内面－上位木口状工具痕。	金雲母・黒色粒 内外－橙色	口縁部破片。

表1 SK-01 出土遺物観察表

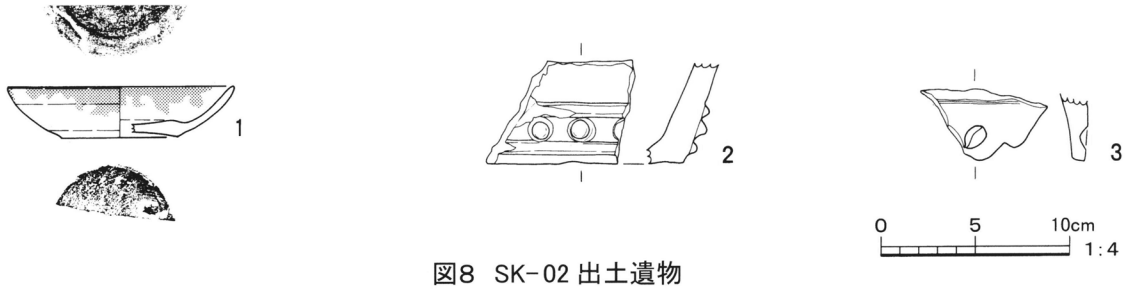


図8 SK-02 出土遺物

No.	器　種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備　考
1	中世土器 かわらけ	口径　(12.0) 底径　(6.2) 器高　2.7	体部は内彎ぎみに立ち上がる。見込周縁部くぼむ。	体部ロクロ整形。底部回転糸切り。	金雲母・黒色粒・赤褐色粒 内外－橙色	1／2。口縁部内外に煤付着。
2	軟質陶器 火　鉢	口径　－ 底径　－ 器高　－	胴部外面下位に凸帯を2条めぐらせ、間に円形突起を貼付。	外面－胴部ナデ、底部ヘラナデ。 内面－胴部ヘラナデ。	白色粒・黒色粒 内外－黒色	胴部～底部破片。
3	軟質陶器 火　鉢	口径　－ 底径　－ 器高　－		外面－ナデ。内面－ナデ。	白色粒・黒色粒 内外－黒色	脚部破片。

表2　SK-02 出土遺物観察表

図9　SK-03

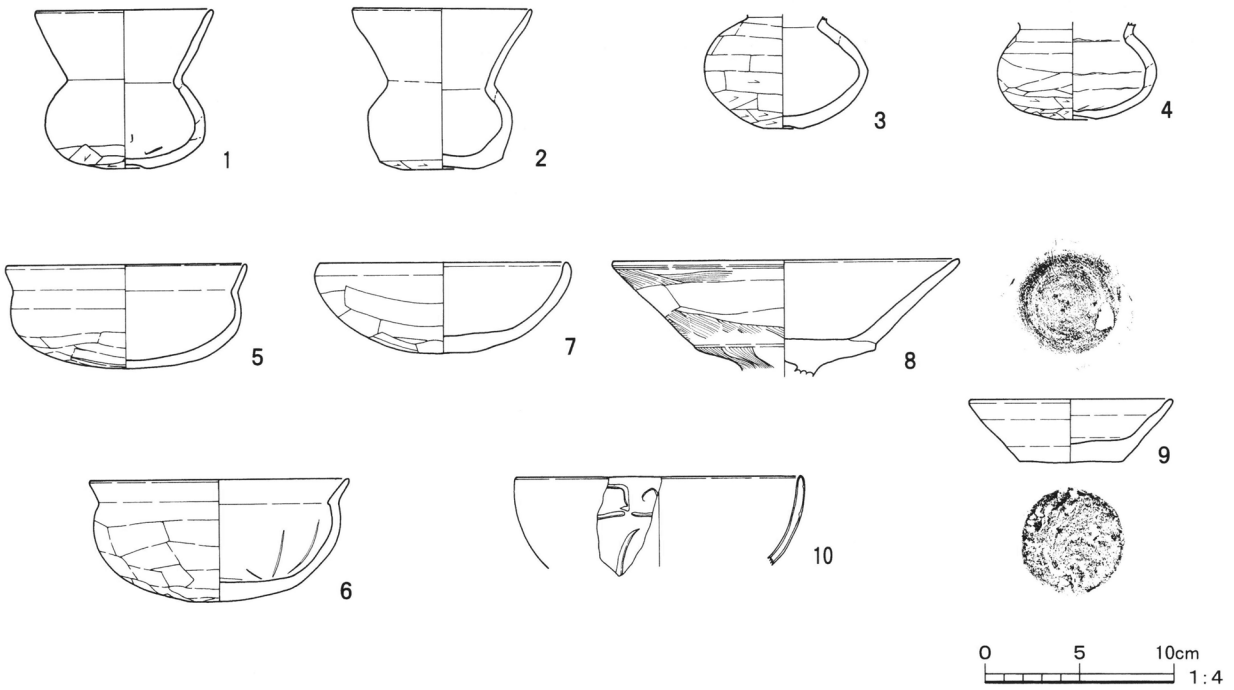


図10 SK-03 出土遺物

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 坩	口径 (9.4) 底径 2.4 器高 8.4	上げ底。体部は中位にふくらみをもち、口縁部はわずかに彎曲して開く。	外面－口縁部ヨコナデ、体部上～中位ナデ、体部下位～底部へラケズリ。内面－口縁部ヨコナデ、体部～底部へラナデ。	石英・黒色粒 内外－明赤褐色	口縁部２／３欠損。
2	土師器 坩	口径 9.6 底径 3.9 器高 8.6	平底。体部は上位にふくらみをもち、口縁部は外反ぎみに開く。	外面－口縁部ヨコナデ、体部ナデ、底部へラケズリ。内面－口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ。	石英・黒色粒 内－褐灰色 外－にぶい赤褐色	完形。
3	土師器 坩	口径 － 底径 2.0 器高 －	上げ底。体部は中位に大きくふくらみをもつ。	外面－体部上～中位へラナデ、体部中位～底部へラケズリ。内面－体部～底部ナデ。	石英・黒色粒 内－黒褐色 外－赤褐色	口縁部欠損。
4	土師器 坩	口径 － 底径 － 器高 －	上げ底。体部は中位にふくらみをもつ。	外面－体部上～中位へラナデ、体部下位～底部へラケズリ。内面－体部～底部へラナデ。	石英・黒色粒 内－明赤褐色 外－赤褐色	口縁部・体部一部欠損。
5	土師器 坏	口径 12.8 底径 － 器高 5.6	丸底。体部は上位にふくらみをもつ。口縁部は短く外反する。	外面－口縁部～体部中位ヨコナデ、体部下位～底部へラナデ。内面－口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ。	石英・白色粒・黒色粒 内外－明赤褐色	ほぼ完形。
6	土師器 坏	口径 13.8 底径 － 器高 6.5	丸底。体部は彎曲して立ち上がり、口縁部は短く外傾する。	外面－口縁部ヨコナデ、体部へラナデ、底部へラケズリ。内面－口縁部ヨコナデ、体部～底部へラナデ。	石英・白色粒・黒色粒 内外－明赤褐色	ほぼ完形。
7	土師器 坏	口径 13.2 底径 － 器高 4.9	丸底。体部は彎曲して立ち上がり、口縁端部はわずかに内彎する。	外面－口縁部ヨコナデ、体部～底部へラケズリ。内面－口縁部ヨコナデ、底部ナデ。	石英・雲母・黒色粒 内－赤褐色 外－にぶい赤褐色	一部欠損。
8	土師器 高坏	口径 18.5 底径 － 器高 －	坏部下位に稜をもち、口縁部は外反ぎみに開く。	外面－口縁部～坏部下位へラナデ。内面－口縁部ヨコナデ、坏底部ナデ。	チャート・雲母・粗砂粒 内－赤褐色 外－褐色	坏部のみ残存。
9	中世土器 かわらけ	口径 (10.8) 底径 5.5 器高 3.4	体部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形。底部回転糸切り後ナデ。見込螺旋状ロクロ目。	金雲母・黒色粒・赤褐色粒 内外－にぶい黄橙色	２／３。
10	青磁 碗	口径 (15.2) 底径 － 器高 －		体部ロクロ整形。	夾雑物なし 内外－オリーブ灰色	口縁部破片。

表3 SK-03 出土遺物観察表

構 造： 形状に表れているとおり、2遺構が重複しているものとみられるが、新旧関係は判然としない。遺構確認面からの深さは、0.78 ～ 1.03m を測り、底面よりゆるやかに立ち上がって遺構確認面に至る。底面および壁面は、随所に大小の凹凸を有する。性質・用途不詳ながら、柱穴や墓穴に該当するものでないことは確かである。

遺 物： 覆土より、中世の土器、陶器が出土している。図6の1～ 10 は、15 世紀後半に製作されたとみられるかわらけである。体部中位にて外反する形状のものが多い。そのほか、陶質の火鉢が見つかっている。

時 期： 不明。中世に構築ないし廃絶された遺構としての可能性も考慮に値するが、明確な傍証を欠いている。

SK-03（図9・10、表3）

位 置： 調査区南東部に位置する。遺構南部が調査区外に位置し、北端にて SK-04 と接する。また、P-11 ～ 13、15、18 と切り合うが、相互の新旧関係は判然としない。

形 状： 南部が調査区外に位置する。遺構確認面において平面不整形、断面は浅い凹字形を呈する。残存範囲での長径は、5.86m である。

構 造： 遺構確認面からの深さは 0.78 ～ 1.53m を測り、壁面は垂直に近い急角度にて立ち上がる。底面および壁面は、随所に大小の凹凸を有する。

遺 物： 覆土より、土師器、中世土器、青磁碗が見つかっている。後述の SK-04 出土遺物と同様、内容に大きな時期幅があり、遺構の帰属時期を特定することが難しい。図 10 の1～8は、5世紀中葉～後半の所産とみられる土師器。1～4は坩、5～7は坏、8は高坏の坏部である。

時 期： 不明である。

SK-04（図11・12、表4）

位 置： 調査区東部に位置する。遺構北部が調査区外にあり、南端にて SK-03 と接するほか、SD-01 に

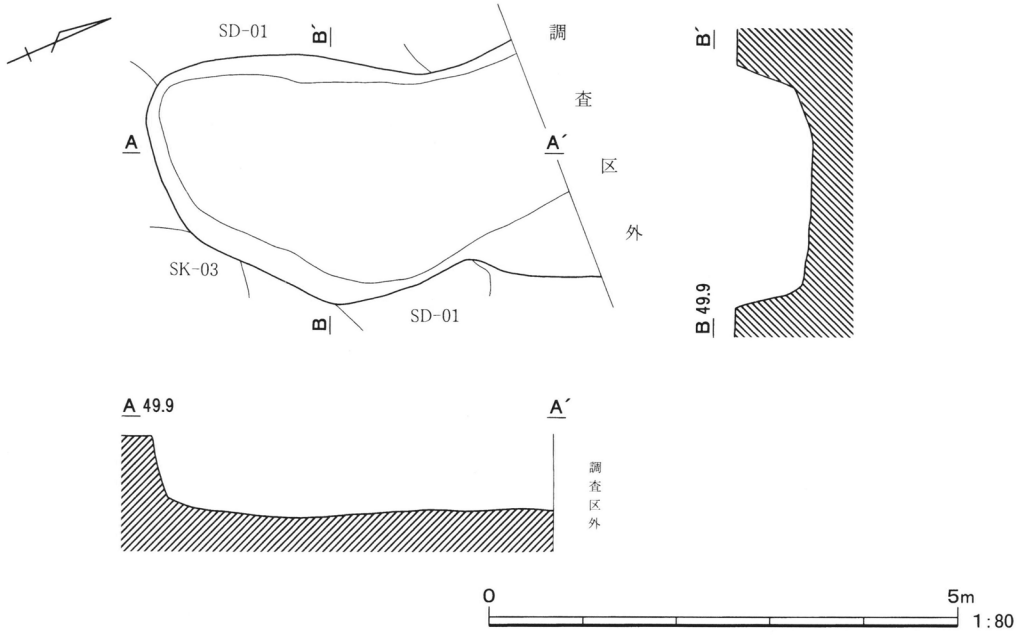


図11 SK-04

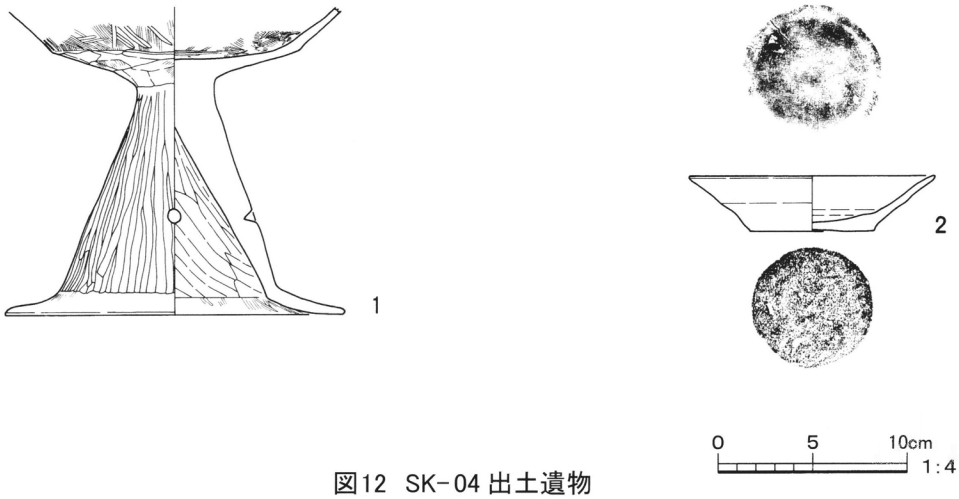


図12 SK-04 出土遺物

No.	器　種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備　考
1	土師器 高坏	口径　－ 底径　(18.0) 器高　－	坏部下位に稜をもつ。脚部はわずかにふくらみ、裾部は外方へ広がる。	外面－口縁部下位ヘラナデ後ミガキ、坏部下位ヘラナデ、脚部～裾部ヘラミガキ。内面－坏底部・脚部ヘラナデ、裾部ヘラナデ後ミガキ。	チャート・黒色粒 内－橙色 外－明赤褐色	2／3。脚部中位に1か所刺突あり。
2	中世土器 かわらけ	口径　(13.0) 底径　6.5 器高　3.0	体部は直線的に立ち上がり、中位でゆるやかに外反する。見込周縁部くぼむ。	体部ロクロ整形。底部ナデ。見込中央ユビナデ。	金雲母・黒色粒・赤褐色粒 内外－橙色	2／3。

表4 SK-04 出土遺物観察表

よる攪乱を顕著に受けている。

形 状： 遺構確認面において平面は不整楕円形ないし双円形に近く、断面は浅い凹字形を呈する。残存範囲における長径 5.17m、短径 2.64m を測る。

構 造： 遺構確認面からの深さは 0.82m を測り、壁面は丸みを帯びつつも比較的急角度で立ち上がる。底面は、おおむね平坦である。

遺 物： 覆土より、土師器高坏と中世のかわらけが検出されている。遺構の帰属時期を決める材料としては、内容に乏しいといえる。1の高坏は5世紀中葉～後半、2のかわらけは 15 世紀後半にそれぞれ製作されたものとみられる。

時 期： 不明である。

SK-05（図13）

位 置： 調査区のほぼ中央、SK-06 の西隣に位置する。

形 状： 遺構確認面において平面隅丸長方形、断面は凹字形を呈し、長径 1.77m、短径 1.29m を測る。

構 造： 遺構確認面からの深さは 0.54m を測り、壁面は 70 度前後の角度にて外傾している。底面および壁面は、比較的平滑である。

遺 物： 出土していない。

時 期： 不明である。

SK-06（図13）

位 置： 調査区の中央やや東寄り、SK-05 の東隣に位置する。

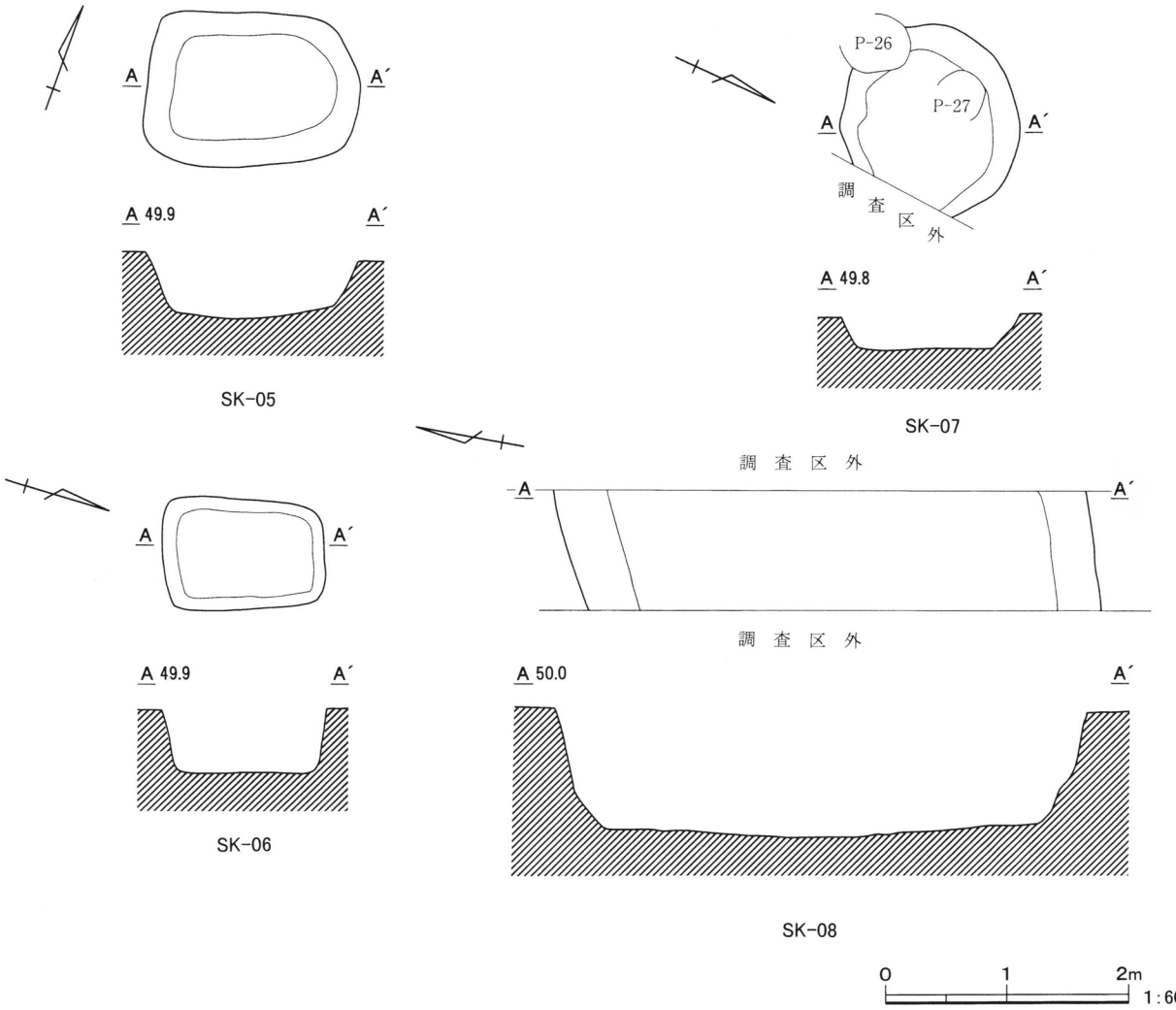


図13 SK-05～08

形 状： 遺構確認面において平面隅丸長方形、断面は凹字形を呈し、長軸 1.34m、短軸 0.93m を測る。

構 造： 遺構確認面からの深さは 0.54m を測り、壁面は垂直に近い急角度で立ち上がる。底面および壁面は、比較的平滑である。

遺 物： 出土していない。

時 期： 不明である。

SK-07（図13・14、表5）

位 置： 調査区南東部、SK-03 の東隣に位置する。P-26・27 による攪乱を受ける。東端部は、調査区外へとのびている。

形 状： 遺構確認面において平面円形、断面は浅い凹字形を呈し、残存範囲での長径は 1.54m を測る。

構 造： 遺構確認面からの深さは 0.29m を測り、壁面は 50 ～ 60° の角度でゆるやかに立ち上がる。底面および壁面は、比較的平滑である。

遺 物： 覆土より、土師器数個体分が出土している。1～3は、5世紀中葉～後半の所産であるが、4の丸底埦は、後出的な様相を帯びている。

時 期： 不明である。

図14 SK-07 出土遺物

No.	器　種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備　考
1	土師器 坩	口径 9.2 底径 － 器高 8.9	丸底気味。体部は中位にふくらみをもち、口縁部は内彎ぎみに開く。	外面－口縁部上位ヨコナデ、下位ヘラナデ、体部上位ナデ、体部下位～底部ヘラナデ。内面－口縁部ヨコナデ、頸部指頭圧痕、体部～底部ヘラナデ。	石英・粗砂粒 内外－橙色	ほぼ完形。
2	土師器 坩	口径 － 底径 2.0 器高 －	上げ底。胴部は中位に大きくふくらみをもつ。	外面－体部上位ヘラミガキ、体部中位～底部ヘラケズリ。内面－体部～底部ヘラナデ。	石英・チャート・黒色粒 内－褐灰色 外－明赤褐色	体部～底部2／3残存。
3	土師器 坩	口径 － 底径 2.5 器高 －	上げ底。体部は中位にふくらみをもつ。	外面－体部上位ヘラナデ、体部下位～底部ヘラケズリ。内面－体部～底部ヘラナデ。	石英・白色粒 内－灰黄褐色 外－明赤褐色	体部～底部1／2残存。
4	土師器 椀	口径 (13.2) 底径 － 器高 6.0	丸底。体部はふくらみをもって立ち上がり、口縁部はやや外傾して立ち上がる。	外面－口縁部～体部上位ヨコナデ、体部下位～底部ヘラナデ。内面－口縁部～体部上位ヨコナデ、体部下位～底部ヘラナデ。	白色粒・黒色粒 内外－明赤褐色	2／3。

表5 SK-07 出土遺物観察表

SK-08（図13）

位 置： 調査区の北東部に位置する。

形 状： 東西両端が調査区外となっているため、平面形は不詳である。断面は浅い凹字形を呈し、残存長4.50mを測る。

構 造： 遺構確認面からの深さは、1.08mを測る。底面付近の壁際に、ごく微弱な段差を有する。壁面は、やや外傾しつつ立ち上がる。

遺 物： 出土していない。

時 期： 不明である。

(2) その他の遺構（図15、表6）

前掲した土坑8基のほか、本遺跡ではピット31基と溝状遺構1条が検出されている。これらは、配置において明確な規則性が見い出されず、また性質・用途についても明らかにしえないものである。21頁の表9にて、検出された全遺構を対象とし、計測値をはじめとする所見を一覧化してあるが、土坑を除く遺構の概要については、もっぱら同表を参照いただきたい。本項では、SD-01の覆土より発見された遺物のみを掲げることとする。

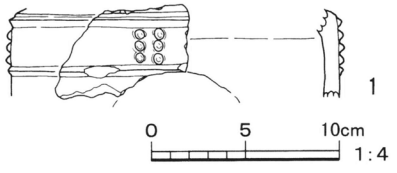


図15 SD-01 出土遺物

No.	器　種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備　考
1	軟質陶器 瓦灯	口径 － 底径 － 器高 －	胴部に凸帯を2条めぐらせ、間に円形突起を貼付。	外面－ナデ。内面－ナデ。	チャート・白色粒・黒色粒 内外－灰色	胴部～脚部破片。

表6 SD-01 出土遺物観察表

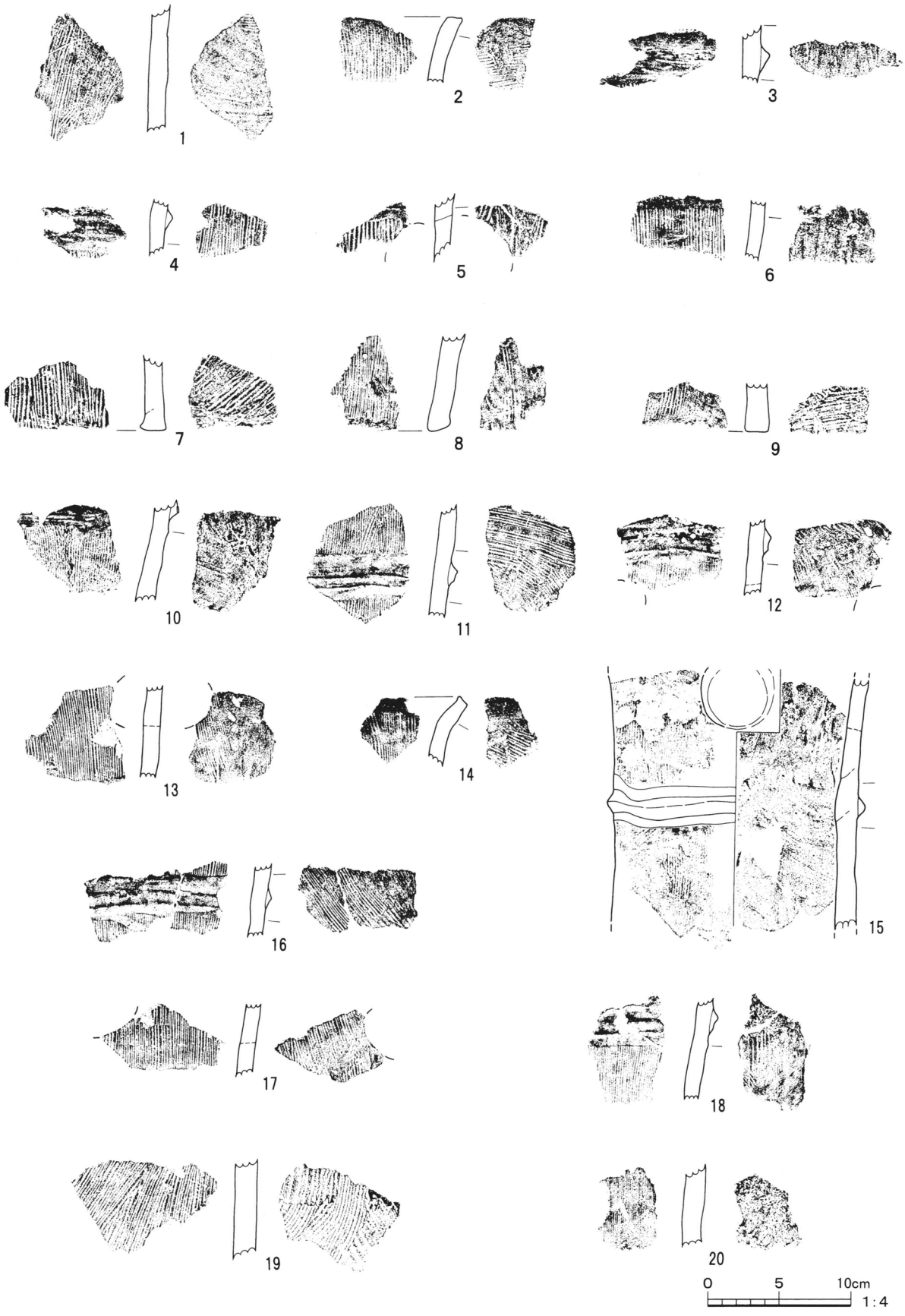


図16 遺構外出土遺物(1)

No.	器　種	部　位	外面調整・ハケ本数	内面調整・ハケ本数	焼　成	色　調	備　　考
1	円筒埴輪		1次タテハケ・11本/2cm	ナナメハケ・8本/2cmおよびナナメナデ	良　好	赤褐色	白色粒・角閃石安山岩粒を含む。
2	円筒埴輪	口縁部	1次タテハケ・9本/2cm	ヨコハケ・10本/2cmおよびタテナデ	良　好	橙色	白色粒・角閃石を含む。口唇部端面・内外面ヨコナデ。
3	円筒埴輪		1次タテハケ・7本/2cm	タテナデ	良　好	赤褐色	白色粒・角閃石安山岩粒を含む。突帯ヨコナデ。突帯幅2.2cm、高さ0.6cm。
4	円筒埴輪		1次タテハケ・10本/2cm	タテハケ・12本/2cm	良　好	橙色	白色粒・角閃石安山岩粒を含む。突帯ヨコナデ。突帯幅1.6cm、高さ0.5cm。
5	円筒埴輪		1次タテハケ・10本/2cm	ナナメハケおよびナナメナデ	良　好	明赤褐色	白色粒・角閃石を含む。突帯下ヨコナデ。円形透孔。
6	円筒埴輪		1次タテハケ・11本/2cm	タテナデ	良　好	明赤褐色	白色粒・角閃石を含む。
7	円筒埴輪	第1段	1次タテハケ・9本/2cmおよび指頭圧痕	ナナメハケ・7本/2cmおよび指頭圧痕	良　好	灰黄褐色	白色粒・角閃石を含む。
8	円筒埴輪	第1段	1次タテハケ・14本/2cm	タテハケおよびナナメナデ	良　好	明赤褐色	白色粒・角閃石安山岩粒を含む。
9	円筒埴輪	第1段	1次タテハケ・10本/2cmおよび指頭圧痕	ヨコハケ・11本/2cmおよび指頭圧痕	良　好	明赤褐色	白色粒・角閃石安山岩粒を含む。
10	円筒埴輪		1次タテハケ・13本/2cm	ナナメナデ	良　好	明赤褐色	白色粒・角閃石安山岩粒を含む。突帯ヨコナデ。突帯高さ0.6cm。
11	円筒埴輪		1次タテハケ・14本/2cm	ナナメハケ・12本/2cm	良　好	明赤褐色	白色粒・角閃石安山岩粒を含む。突帯ヨコナデ。突帯幅2.0cm、高さ0.7cm。
12	円筒埴輪		1次タテハケ・14本/2cm	ナナメハケ・11本/2cmおよびナナメナデ	良　好	にぶい赤褐色	白色粒・角閃石を含む。突帯ヨコナデ。突帯幅2.1cm、高さ0.6cm。円形透孔。
13	円筒埴輪		1次タテハケ・14本/2cm	ナナメハケ・13本/2cmおよびナナメナデ	良　好	赤褐色	白色粒・角閃石を含む。円形透孔。
14	円筒埴輪		1次タテハケ・12本/2cm	ナナメハケ・10本/2cm	良　好	明赤褐色	白色粒・角閃石を含む。口唇部端面・内外面ヨコナデ。
15	円筒埴輪		1次タテハケ・12本/2cm	タテ・ナナメナデ	良　好	明赤褐色	白色粒・角閃石を含む。突帯ヨコナデ。突帯幅1.7cm、高さ0.5cm。円形透孔。
16	円筒埴輪		1次タテハケ・14本/2cm	ナナメハケ・12本/2cmおよびナナメナデ	良　好	明赤褐色	白色粒・角閃石を含む。突帯ヨコナデ。突帯幅1.6cm、高さ0.4cm。
17	円筒埴輪		1次タテハケ・12本/2cm	タテハケ・11本/2cm	良　好	明赤褐色	白色粒・角閃石を含む。円形透孔。
18	円筒埴輪		1次タテハケ・14本/2cm	ナナメハケ・8本/2cmおよびナナメナデ	良　好	赤褐色	白色粒・角閃石を含む。突帯ヨコナデ。突帯幅2.0cm、高さ0.5cm。
19	円筒埴輪		1次タテハケ・12本/2cm	ナナメハケ・10本/2cm	良　好	明赤褐色	白色粒・角閃石を含む。
20	円筒埴輪		1次タテハケ・16本/2cm	ナナメナデ	良　好	明赤褐色	白色粒・角閃石を含む。

表7　遺構外出土遺物観察表(1)

(3) 遺構外出土遺物（図16・17、表7・8）

これまでふれてきた土師器、陶磁器に加え、今回の調査では、埴輪の破片が量的に一定のまとまりをもって出土している。いずれも土坑の覆土、あるいは表土より見つかっており、古墳時代の遺構に伴う状況は確認できない。

実測可能であった埴輪の破片26点の内訳は、円筒埴輪20点、形象埴輪6点となっている。遺存率が低く、段構成などを明らかにできる例は見当たらない。胎土に角閃石ないし角閃石安山岩粒を含むものが大半を占め、おおむね同一の場所で製作されたものと考えられる。突帯には、断面が低いM字形になるものと三角形を呈するものとがある。残存する透孔は、いずれも円形である。図17-21の形象埴輪は、貼付された粘

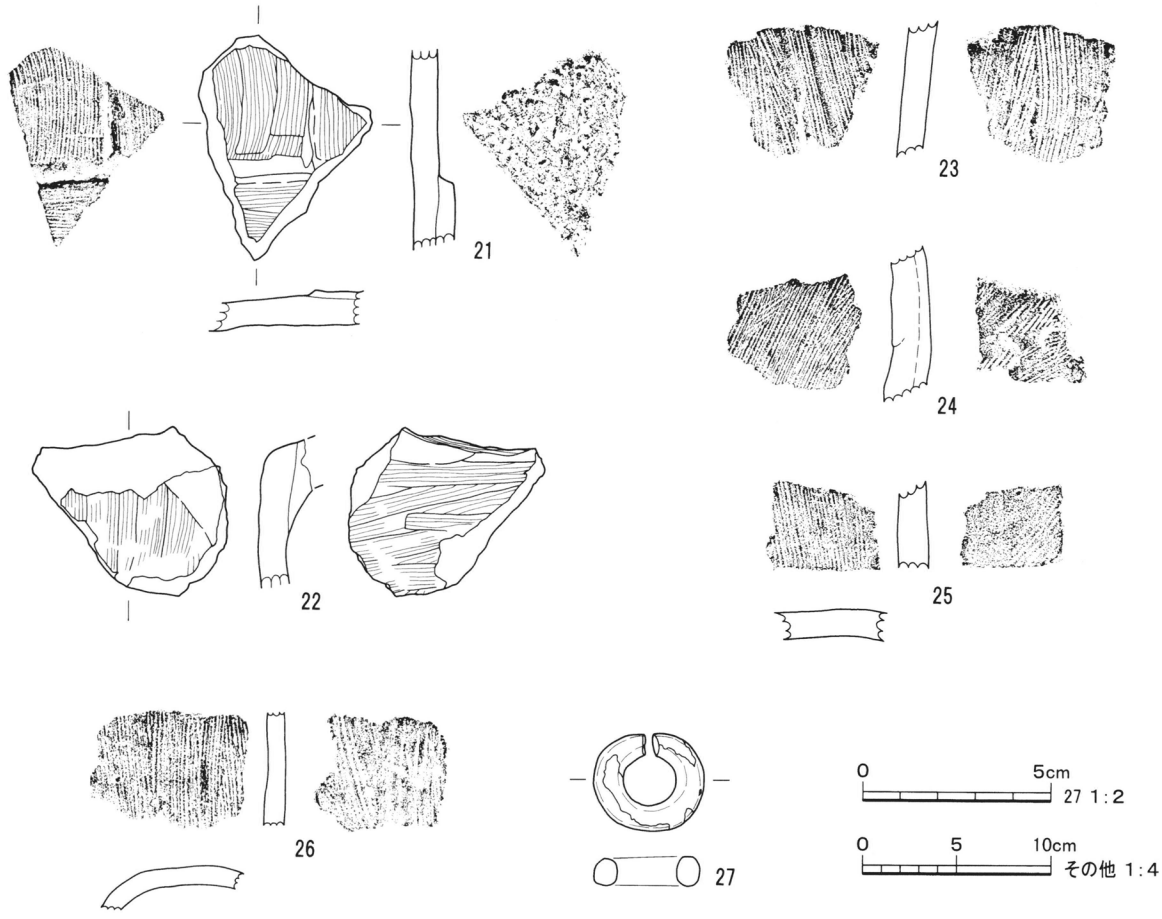


図17 遺構外出土遺物(2)

No.	器　種	部位・形態の特徴	成形・調整手法の特徴	焼　成	色　調	備　考
21	形象埴輪	板状の破片。縦方向・横方向に粘土帯を貼付。家か。	外面－ハケおよびナデ。 内面－器面荒れており不明瞭。	良　好	橙色	白色粒・角閃石を含む。
22	形象埴輪	破片上端は横外方へ延びる。部位不明。	外面－ハケおよびナデ。 内面－ハケおよびナデ。	良　好	明赤褐色	白色粒・角閃石安山岩粒を含む。
23	形象埴輪	板状の破片。部位不明。	外面－ハケ。 内面－ハケおよびナデ。	良　好	明赤褐色	白色粒・角閃石安山岩粒を含む。
24	形象埴輪	板状の破片。部位不明。	外面－ハケ。 内面－ハケおよびナデ。	良　好	明赤褐色	白色粒・角閃石を含む。
25	形象埴輪	板状の破片。部位不明。	外面－ハケ。 内面－ハケおよびナデ。	良　好	橙色	白色粒・角閃石を含む。
26	形象埴輪	ゆるやかに彎曲する。部位不明。	外面－ハケ。 内面－ハケおよびナデ。	良　好	橙色	白色粒・角閃石を含む。
No.	種　類	法　量（cm・g）				備　考
27	耳　環	銅芯金張り　長径：2.9　短径：2.5　玦部間隔：0.2　断面長径：0.8　断面短径：0.6 重さ：16.05				金張りほぼ剥落。

表8 遺構外出土遺物観察表(2)

土帯の形状などから、家を模したものである可能性が指摘できる。

このほか、遺構外出土遺物として耳環が1点採集されている。確証に乏しいものの、近辺の古墳に付随していたものが、なんらかの理由により原位置を離れた結果とも考えうる。

遺構名	平面形	規模（m）			備考
		長径	短径	深さ	
SK-01・02	不整楕円形	6.40	4.24	1.03	切り合い関係不明の２遺構を一括、中世土器などが出土
SK-03	不整形	5.86	—	1.53	土師器、中世土器、青磁碗が出土
SK-04	不整楕円形	5.17	2.64	0.82	土師器と中世土器が出土
SK-05	隅丸長方形	1.77	1.29	0.54	
SK-06	隅丸長方形	1.34	0.93	0.54	
SK-07	円形	[1.54]	—	0.29	土師器が出土
SK-08	—	4.50	—	1.08	
P-01	楕円形	0.20	0.16	0.11	
P-02	円形	0.28	0.26	0.24	
P-03	円形	0.28	0.24	0.47	
P-04	円形	0.28	0.26	0.38	
P-05	円形	0.80	0.78	0.51	
P-06	円形	0.36	0.30	0.17	
P-07	円形	0.38	0.38	0.31	
P-08	円形	0.24	0.24	0.16	
P-09	楕円形	0.62	0.52	0.3	
P-10	円形	0.84	0.82	0.32	SD-01と重複
P-11	円形	0.84	0.68	0.53	
P-12	円形	0.32	[0.26]	—	SK-03を切る
P-13	円形	0.40	[0.30]	—	SK-03を切る
P-14	楕円形	0.32	0.30	0.26	
P-15	楕円形	[0.62]	0.50	0.38	SK-03を切る
P-16	楕円形	0.32	0.30	0.37	P-18を切る
P-17	楕円形	0.36	0.34	0.19	P-18を切る
P-18	楕円形か	[0.92]	[0.56]	—	SK-03を切り、P-16・17に切られる
P-19	楕円形	0.44	0.34	0.52	
P-20	円形	0.34	0.34	0.16	
P-21	円形	0.90	0.82	0.56	
P-22	円形	0.40	0.34	0.31	
P-23	円形	0.30	0.26	0.64	
P-24	円形か	0.52	[0.32]	0.38	
P-25	隅丸方形	0.58	0.54	0.11	
P-26	楕円形	0.58	0.48	0.22	SK-07を切る
P-27	楕円形	0.46	0.38	0.23	SK-07を切る
P-28	楕円形	0.72	0.58	0.41	
P-29	円形	0.42	0.38	0.28	SD-01を切る
P-30	楕円形	[0.60]	0.56	0.50	SD-01を切る
P-31	隅丸長方形か	[0.80]	[0.72]	0.18	
SD-01	—	[13.05]	[2.48]	0.32	軟質陶器(火鉢)が出土

表9　検出遺構観察表

V まとめ

今回の調査は、埴輪製作址として周知されている赤坂埴輪窯跡の近隣、そして五十子陣跡の東端部北側に位置する当地の考古学的実態をさぐる一好機であった。300 ㎡という調査面積による制約のもと、地味ながら一帯の歴史的環境を裏書きする成果が得られた。

検出された主な遺構は、8基を数える土坑である。遺構自体の性質・用途、帰属時期は判然としないものの、その覆土に包含されていた遺物は、古墳時代中期（5世紀中葉～後半）、15 世紀後半代と、およそ 1000 年の間をおいて土地利用の盛期が訪れたことを示唆している。その2期は、赤坂埴輪窯跡の稼動時期にほど近く、また五十子陣跡が設営された時期と符合する。

埴輪の破片に関しては、上記の埴輪窯跡に直接伴うものとみる解釈と、かつて近辺に存在していた古墳が消滅するなどした際に当地へ混入したという推測の両者が考えられる。ただし、同窯跡と本遺跡それぞれの出土遺物が示す時期幅に若干の相違がある点、および本遺跡にて耳環が見い出されている点では、後者の推測により高い蓋然性を認めるべきかもしれない。

1・2号土坑にて出土した中世のかわらけは、什器として量産されていたものである。図6-2～10をみると、法量に若干の個体差があり、口縁部径にして 13.9(推定)～15.0cm といった振幅が認められる。小型である図6-1の個体以外はおおむね中型に属するものと考えられるが、ひとつの規格にみる上述の「ゆらぎ」が、とりもなおさず量産の一側面を垣間見せているといえる。また、本遺跡のかわらけは、体部中位における屈曲・外反の度合いが比較的強く、見込のユビナデが1条ないし3条となるものが多い、という特徴をもっている。こうした特徴が、当該期のかわらけの小地域相として理解しうるものかどうかは、類例集積を前提としつつ今後の検討課題となろう。

なお、検出された遺構には、溝状遺構1条が含まれていた。現在の女堀川におおむね沿うように南西－北東方向へのびていたとみられ、南西部は攪乱によって消失していた。覆土からは中世の軟質陶器(瓦灯)が出土したのみで、他の遺構と同様、性質・用途、帰属時期とも不詳である。とはいえ、五十子陣跡に伴う可能性をいくばくか有する遺構として、ここに付記する次第である。

主要参考文献

本庄市　1976『本庄市史 資料編』

坂本和俊　1984「埼玉県」『古墳時代土器の研究』古墳時代土器研究会

坂本和俊　1985「埼玉県における埴輪編年の諸問題」『第6回三県シンポジウム 埴輪の変遷－普遍性と地域性－』北武蔵古代文化研究会

本庄市　1986『本庄市史 通史編Ⅰ』

木津博明　1989「上野国における在地生産土器について－上野国分僧寺・尼寺中間地域を中心として－」『中近世土器の基礎的研究』Ⅴ 日本中世土器研究会

河野眞知郎　1993「中世鎌倉火鉢考」『考古論叢 神奈河』第2集　神奈川県考古学会

服部敬史　1998「土師器皿からみる中世後半期の東国」『楢崎彰一先生古希記念論文集』

中村倉司　1999「埼玉県における5世紀代の土器 ― 和泉式土器の行方 ―」『東国土器研究』第5号　東国土器研究会

梅沢太久男　2000「北武蔵の中世城郭について」『埼玉考古』第 35 号　埼玉考古学会

東五十子遺跡調査会　2002『東五十子・川原町 児玉郡市広域市町村圏組合小山川クリーンセンター・湯かっこ建設工事関係発掘調査報告』

浅野春樹　2003「東国における在地土器の生産と流通」『戦国時代の考古学』高志書院

本庄市教育委員会　2003『宥勝寺裏埴輪窯跡・宥勝寺北裏 本庄新都心土地区画整理事業に伴う遺跡範囲確認調査報告書』

写　真　図　版

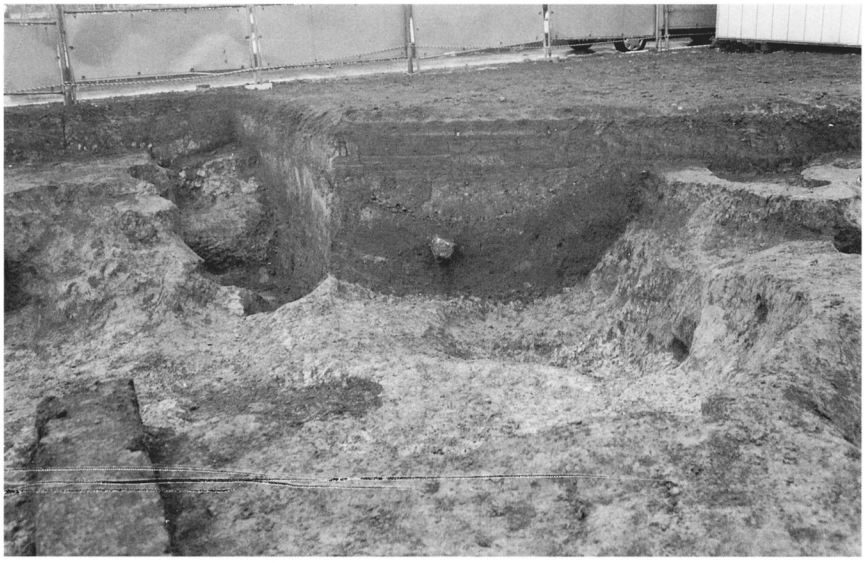
（国土地理院、2000年10月撮影）

遺跡の位置および周辺の地形

調査区東部

調査区西部

SK-01・02 (1)



SK-01・02 (2)

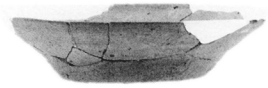
SK-03

SK-04

SK-01

1

2


3

4

5

6

7

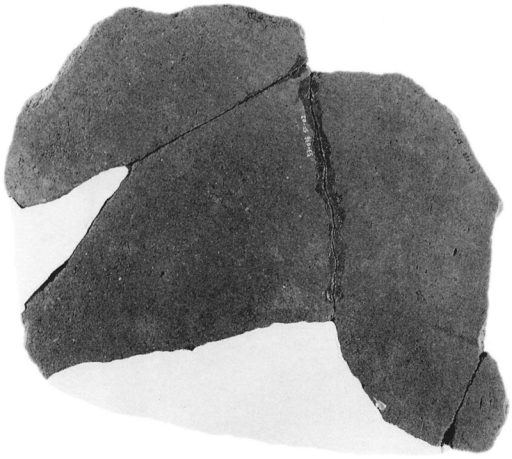
8

9

10

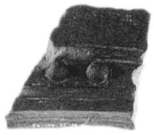
11

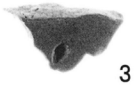
12


11

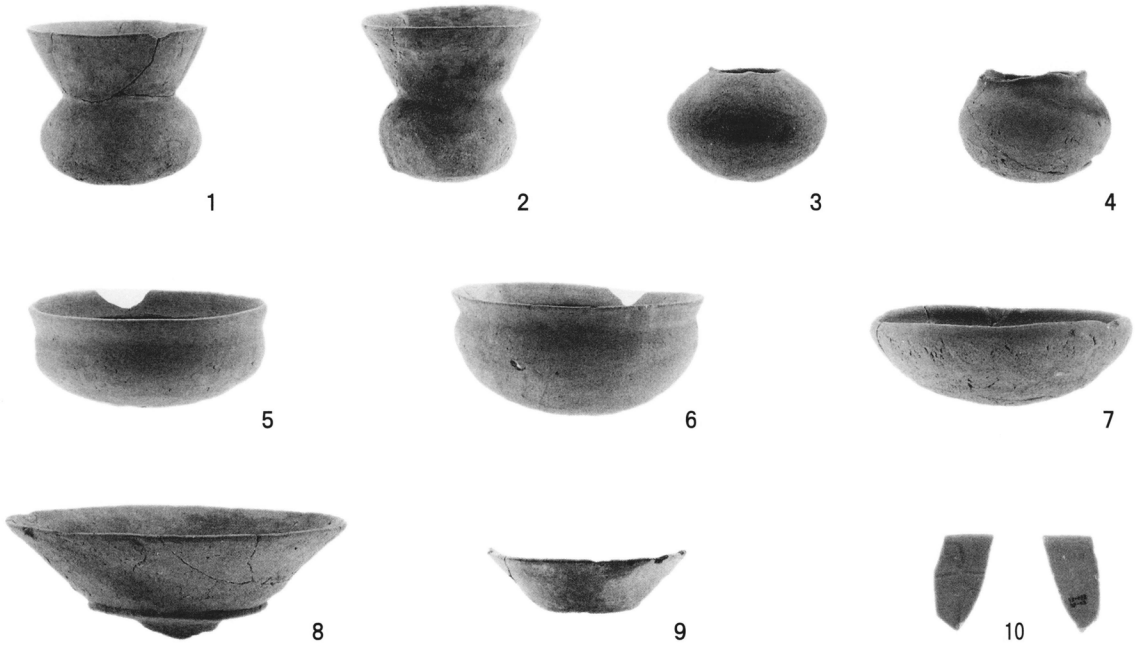
SK-02

1

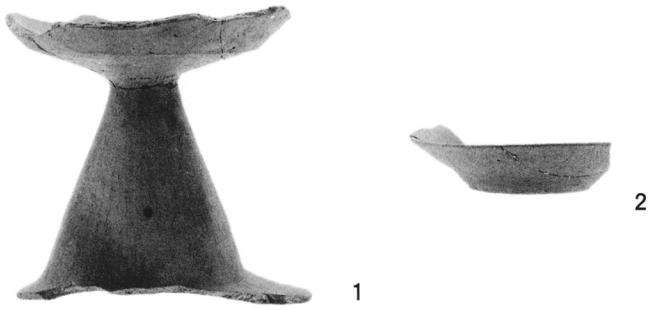

2


3

SK-01·02 出土遺物

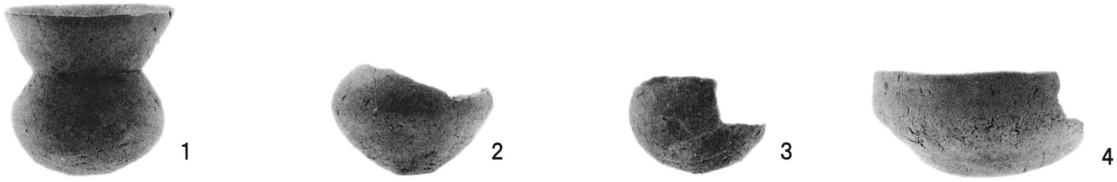


SK-03 出土遺物

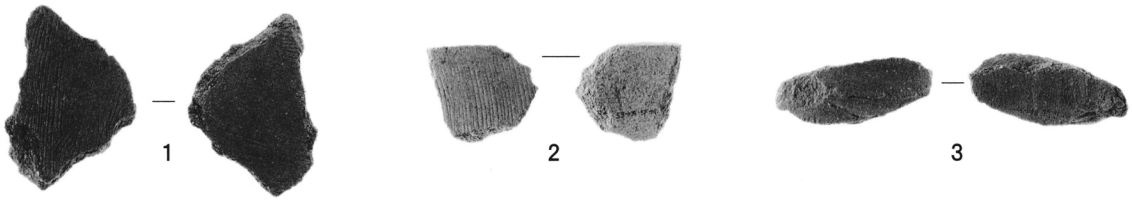


SK-04 出土遺物

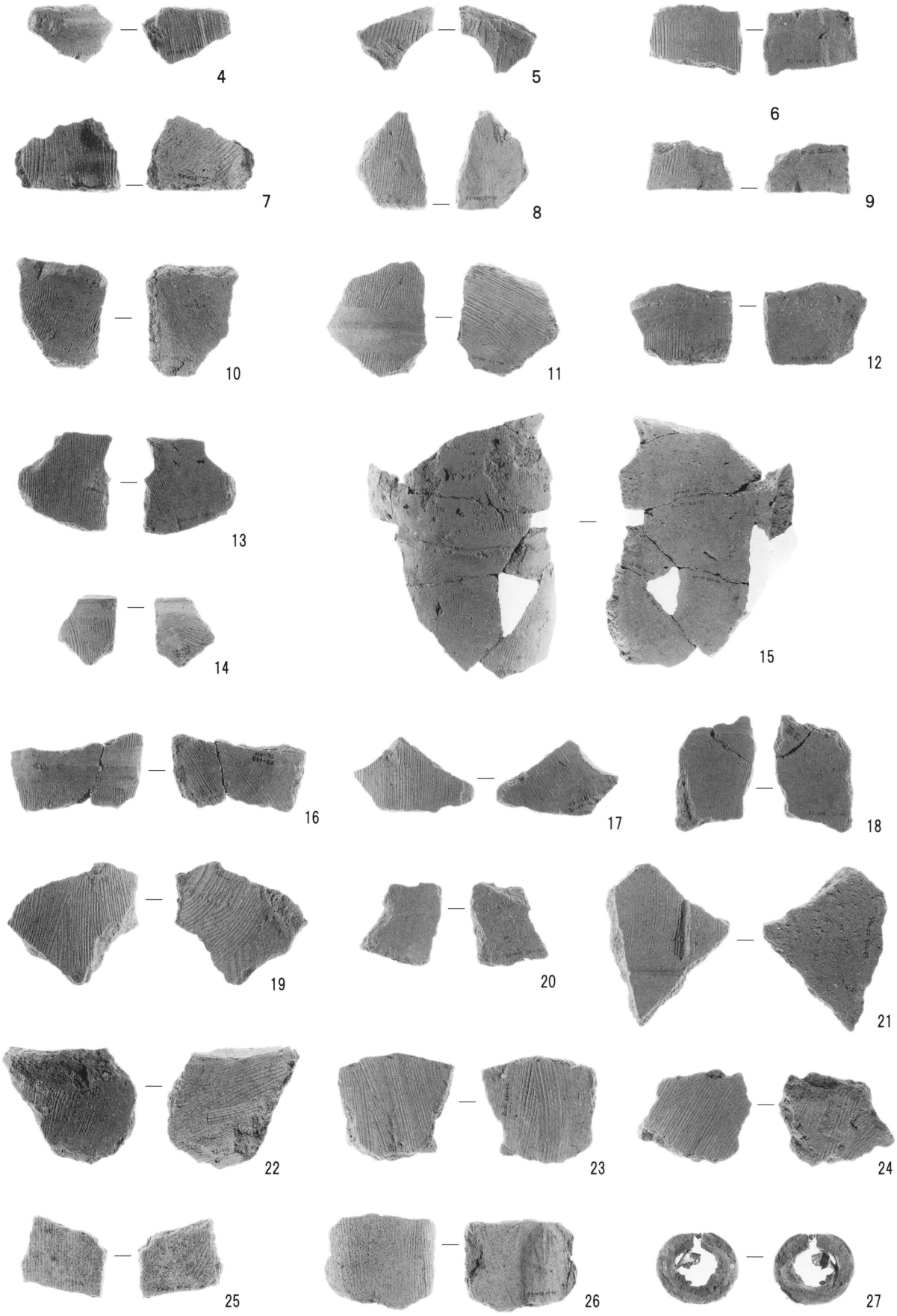
SD-01 出土遺物



SK-07 出土遺物



遺構外出土遺物(1)



遺構外出土遺物(2)

報告書抄録

ふりがな	ひがしいかっこあかさかいせき
書　名	東五十子赤坂遺跡
副書名	ヤマト運輸株式会社貨物集配施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　次	
シリーズ名	本庄市遺跡調査会報告
シリーズ番号	第8集
編著者名	和久 裕昭　有山 径世
編集機関	本庄市遺跡調査会
所在地	〒367-8501　埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号　本庄市教育委員会内　TEL 0495-25-1186
発行年月日	西暦2004(平成16)年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひがしいかっこ 東五十子 あかさかいせき 赤坂遺跡	さいたまけんほんじょうし 埼玉県本庄市 おおあざひがしいかっこあざ 大字東五十子字 あかさか 赤坂672番1他	53	038	36°13′43″ 36°13′32″	139°12′41″ (新座標・世界測地系) 139°12′53″ (旧座標・日本測地系)	19990222～ 20040331	300㎡	貨物集配 施設建設

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東五十子 赤坂遺跡	土坑群	古墳時代中期 ～中世	土坑8基、ピット31基、 溝状遺構1条	土師器、中世土器、 陶磁器、埴輪、耳環	

本庄市遺跡調査会報告　第８集

東五十子赤坂遺跡

ヤマト運輸株式会社貨物集配施設建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成16年３月25日　印刷
平成16年３月31日　発行

発行／本庄市遺跡調査会
〒367-8501　埼玉県本庄市本庄３丁目５番３号
本庄市教育委員会内
電話　0495-25-1186

印刷／朝日印刷工業株式会社